SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

文部科学省指定

平成29(2017)年度　スーパーグローバルハイスクール研究報告書

平成26(2014)年度指定　第4年次

「Active Dialog ―共生の実現へ―」

学校法人聖心女子学院
札幌聖心女子学院中学校・高等学校

目　次

Ⅰ．巻頭言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅱ．平成２９年度ＳＧＨ研究開発完了報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

Ⅲ．学校設定科目「グローバルイシューズ」の取り組み

（１）高校１年

フィールドワークと連動した探究学習（人との共生）　・・・・・・・・・　15

論証重視型日本語ディベート　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19

（２）高校２年

フィールドワークと連動した探究学習（自然との共生）　・・・・・・・・　22

即興性重視型英語ディベート　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　36

（３）高校３年

アクションプランの計画と実行（人との共生、自然との共生）　・・・・　41

国際的資質や態度に関する自己評価・アンケート　・・・・・・・・・・・　45

（４）参考資料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　48

Ⅳ．ニューヨーク国連研修報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　65

Ⅴ．本校の外国語教育について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　81

Ⅵ．教科・科目への導入　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　87

Ⅶ．関係資料

（１）本校のＳＧＨ構想の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　95

（２）目標設定シート　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　98

（３）教育課程表・教育課程特例申請について　・・・・・・・・・・・・・・・・　103

（４）運営指導委員会議事録　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　105

巻頭言

Active　Dialog　－共生の実現へ－

札幌聖心女子学院中学校・高等学校
校　長　　阿　部　益太郎

札幌聖心女子学院は、2014(平成 26)年度からスーパーグローバルハイスクール(SGH)として、「Active　Dialog　－共生の実現へ－」を研究開発目標に、「人との共生・自然との共生」のテーマのもと、グローバルリーダーの育成を目指すことを目的とした実践研究を進め、今年度で 4 年目を迎えております。

私たちが育てたい生徒像は、「自ら学ぼうとする意欲を持つ生徒」、「課題を見出す目を養う生徒」、「課題解決策を考え、実行に移す生徒」、「プレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を磨く生徒」です。これは本校の教育理念にある「よりよい社会を築くことに貢献する賢明な女性の育成」に通じるものと考えております。SGH の取組を進めるにあたり、本校では「フィールドワークと連動した探究学習」、「課題研究ミーティング」及び「ディベートワークショップ」の 3 つの柱からなる学校設定科目「グローバルイシューズ(GI)」を実施しております。

本年度は、引き続き高校 3 年生のアクションプランの策定と実行を重点目標としました。GI の学びの総まとめとして、「解決すべき課題を自ら見つけ、その解決の方策を探り判断する。」、「課題解決への行動に結び付けるため、学校内外の人や組織との交渉力やプレゼンテーション能力を向上させる。」、「周囲への働きかけを行うことで、人や環境について物事をよい方向に変容させる。」の 3 つをねらいとしました。高校 3 年生の GI では、「到達目標を決める。」、「記録と活動の実績やその根拠となるものを整理する。」、「目標達成できているかの確認を行う。」ことの 3 点が大切であることを意識するよう指導に努めてきました。高校 1 年の時から 2 年間積み上げてきた知識や経験を基に、自らが行動に移していく解決すべき課題をイメージ化した上で、アクションプランを設定するよう求めております。

実際に、生徒たちは連携先として、自ら企業や関係団体、関係機関、NPO 法人、幼稚園・学校等、様々な相手先と積極的に交渉しました。自分たちのアクションプランの目的を説明し連携を実現するための理解を得るには多くの困難を伴い、苦しむことも数多くありましたが、このことが生徒たちを成長させ、現実社会と向き合っていく上での大きな経験となりました。

SGH 研究を進めるにあたり、文部科学省をはじめ、関係の皆様に多大なご支援を賜りまっております。衷心より感謝申し上げます。そして、研究推進等についてのご指導・ご助言をいただいた運営指導委員の皆様に、厚くお礼申し上げます。SGH の取組を進めて以来、生徒たちの優れた取り組みや、その成長には目を見張るものがあります。卒業生が「札幌聖心は自分が成長していることを自分で感じ取ることができた場所だった。」という言葉を残し本校を巣立っていきました。私たちは本校で学ぶ生徒たちが自らの変容を自覚し、必ずや世界で活躍するグローバルリーダーを目指してくれるものと大きな期待を寄せております。

今後とも、ぜひ本校へのご指導、ご助言を賜わりますようお願い申し上げます。

研究開発完了報告

（別紙様式３）

平成３０年３月３０日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住　　所　　東京都渋谷区広尾4丁目3番1号
管理機関名　　学校法人　聖心女子学院
代 表 者 名　　理事長　　宇野　三惠子　　印

平成２９年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間
　平成２９年４月１日（契約締結日）～平成３０年３月３０日

２　指定校名
　学 校 名　　札幌聖心女子学院高等学校
　学校長名　　阿部　益太郎

３　研究開発名
　Active　Dialog　－共生の実現へ－

４　研究開発概要
　本校が、総合的な学習として実施してきた課題研究を発展させた学校設定科目「グローバルイシューズ」を全学年に開設し、実践を行った。高１では主に人との共生、高２では自然との共生について国内や国外でのフィールドワークを通して現状の調査を行った。現地の生の声からは報道から得られる情報より深い内容に触れることができ、実績を上げている事実と共に障害や問題にも触れることができた体験となっている。高３では、２年間の活動を基に問題解決に向けた探究として「アクションプラン」を作成し、校内行事や校外で実践を行った。なお、高１は日本語ディベート、高２は英語ディベートで、ディベートの土台となる応用力や論理性の育成を図ってきた。論理的な思考力や発表力育成を身につけることが英語表現力向上の土台となると考えている。それぞれの学年前半のグローバルイシューズを探究の重点期間としている。また、高校３年生は進学の準備があるため、やはり前半のアクションプラン計画が重要となってくる。アクションプランの継続探究も可能とし、少数ではあるが、高校２年生でアクションを実行する姿も見られた。
　研究成果の発表の場として１０月６日～７日に「ＳＧＨ研修及び海外体験学習報告会」を計画し、道内の指定校や地域の方々にも参加をいただき開催することができた。また、道内の指定校が一堂に会した北海道主催の交流会に参加し、取り組み内容を交流することができた。

5　管理機関の取組・支援実績

（１）実施日程

・実施計画に基づき、ＳＧＨで掲げている「共生」実現に向けた取り組みが支障なく推進できるようフィールドワーク活動費や、アクションプランアドバイザー等の人件費、ＩＣＴ環境構築に支援を行う。

・各支援の内容についての意見や要望を生かし、日程や内容について実施校と調整を図りながら計画・推進する。

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①フィールドワーク活動費補助 ②人件費補助 ③姉妹校ウェブシステム	②	① ② ③	② ③	① ② ③	① ② ③	② ③	② ③	② ③	② ③	② ③	① ② ③	② ③

（２）実績の説明

①　文部科学書の活動予算が減額されている中、国内外のフィールドワーク先も多岐にわたっている。ニューヨーク研修を筆頭に、新規フィールドワーク参加のための経費について、文部科学省の予算に追加して実施校に寄与した。新たなフィールドワークの経費については可能な限り支援を予定している。参加対象者は高１と高２全員であり、昨年度参加している高３は、何らかの事情で参加がかなわなかった場合の他は対象外としている。

②　関連業務など業務量が増大するため、生徒のアクションプラン立案や国内外を含めた外部とのコンタクトをサポートする海外交流アドバイザーの雇用、事務的な業務やアクションプランのサポートを行う職員の雇用に配慮を行った。

③　ウエブシステムを活用し、講義や会議に活用する試みが行われ、姉妹校合同の会議(校長会、広報委員会等)に同システムが活用されている。ニューヨーク研修期間に、参加している生徒と札幌で活動している生徒との情報交換会が実現している。また、タブレット端末設置台数を増やし、ネット環境を生かしたコミュニケーション手段として、グローバルイシューズはもちろんであるが、他教科の学習にも多く活用されている。最も活用しているのは、今年度は高１であった。ＳＧＨの取り組みが始まった初年度平成２６年度より始めたウエブ上での交流活動度あるが、ネット環境の改善もあり、交流がスムーズになってきている。

6　研究開発の実績

（１）実施日程

業務項目	実施期間（ 平成29年4月1日(契約日) ～ 平成30年3月30日 ）											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
探究学習 ①テーマ設定 ②調査・研究	高1 高2	高1 高2	高1 高2	高1 高2	高1 高2	高1 高2	高1 (NY国連研修生)	高1 (NY国連研修生)	高1 (NY国連研修生)	高1 (NY国連研修生)	高1 (NY国連研修生)	
探究学習 ③フィールドワーク		高2		高1 高2	高1 高2						高1	
探究学習 ④報告会・発表会							高1 ～高3					高1高2 翌年度へ
⑤課題研究 ミーティング	高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3		高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3

⑥論証重視型 日本語ディベート							高1	高1	高1	高1	高1	
⑦即興性重視型 英語ディベート							高2	高2	高2	高2	高2	
⑧キャリア教育 との連携							高1					
⑨アクションプランの 策定と実行	高3	高3	高3	高3	高3	高2 高3	高2 高3		高2 高3			

（２）実績の説明(上記一覧表の左欄項目：業務項目の順)

＜ＳＧＨ対象生徒　高校生全員＞

・高校在籍数　　高校1年生…32名　高校2年生…36名　高校3年生…31名

・ＳＧＨ対象生徒数　高校1年生…32名　高校2年生…36名　高校3年生…31名

①　探究学習：テーマ設定

高１～３までの全学年で探究活動が動き出して３年目となる。高１、高２のテーマ設定については、活動自体が軌道に乗りSGHの探究活動取り組みが定着していることから、生徒の意識も高まっている。また、生徒が上級生の動きを目にしていることもあり、設定に向けた取り組みは順調に進んでいる。しかし、ある程度のテーマ解決への道筋とアクションプランの見通しができていない場合は時間がかかる。

高３は「アクションプラン」として、これまで２年間活動してきた「人との共生」「自然の共生」からどちらかを選択し、解決のための方策や計画、現実的なアクションとなった。

前学年でのテーマ設定が、解決に繋がりづらいために見直しを決断する生徒、解決策のアクションが現実にそぐわないことに気づくまでに時間がかかる生徒もいた。取り組む期間を生み出すことも意識した計画を立てることで、それぞれが設定したテーマ解決に向けたアクションプランに実行ができていた。

②　探究学習：調査・研究

外部機関との連携でアクションを計画していた高３生徒は、相手先機関や公立の小学校に、アクションの趣旨やねらい、それらの達成のためのアクションの内容等丁寧に伝えていた様子である。しかし、趣旨がなかなか伝わらずに、学校への直接連絡には丁寧に対応してきた。また、アクション自体が目標達成に至らないことが予想される計画もあり、生徒のアクションをサポートする教師（メンター）から指導を受ける場合もある。プラン実施に向けた取り組みの難しさを実感し、計画変更、再計画立案も大きな学びと言える。様々な紆余曲折はあるが、複数年度で更に深められる取り組みも見られた。

③　探究学習

【国内フィールドワーク】

・ＳＧＨ東京研修（7/24～26、高1…4名）

国内フィールドワークはほとんどが昨年度と同様のプログラムである。国内研修の希望が多い年であった。高１は「人との共生」、高２は「自然との共生」がテーマでそれぞれ探究活動を行ってきた。東京は、特定非営利活動法人：チャイルド・ファンドジャパン、特定非営利活動法人：難民を助ける会（AAR Japan)、特定非営利活動法人：国連UNHCR協会など、一般の人たちが目にすることの少ない難民の一時待機所などを見学することができた。

・ＳＧＨ恵庭研修（5/31、高2…5名）

自然との共生「環境負荷を軽減し、持続可能な社会の形成に貢献したい」の思いで立

ち上げた「えこりん村」。自然環境の保護を～未来の子どもが幸せに暮らすために～と銘打っている。外来種の「セイヨウオオマルハナバチ」の駆除活動の様子や捕獲実習を行う。今年度からフィールドワーク先として訪れることにしたが、最も自然環境に特化した取り組みが行われている地である。

・ＳＧＨニセコ研修（7/21、高1…11名）
　ここ１０年ほどの期間に海外からの登録者が増加していることから、海外の人々との共生と関連が深いということで高校１年生が多く参加している。自然豊かな土地なので、主要な産業が観光や農業となるのは納得していた。参加した生徒は、豊かな自然のなかで育まれた新鮮な食べ物、観光を町作りの柱としている。３０年以上前から、ニセコではサービス業が第一の産業となっている。

・ＳＧＨ美唄研修（7/18、高2…9名）
　札幌聖心でも使用しているチョークを製造している会社を訪問。ホタテの貝殻を再利用し、品質の良いチョークを製造しているだけでなく、障害のある人たちが働きやすい環境をも提供している日本理化学工業。職場内でも、環境の改善、より働きやすい環境作りに多くの人たちが関わっている職場である。自然環境を守ることを第一にした会社であると同時に、人との共生の内容で社会にも貢献している会社である。

・ＳＧＨ江別、鹿追研修（7/18、高2…6名）
　自然との共生を軸に、町村農場で行っているバイオガスの利用について、高２が現地を訪れ、町村農場の社長や、燃料の精製に携わっている方々からお話をいただくことができた。また施設見学を通して、様々な工夫や二次的に排出される物質の処理の問題も気づくことができた。

・ＳＧＨ東川研修（7/18、高2…10名）
　昨年度は台風の影響で現地に行くことができず、予定を変更して札幌市の水道局を訪問した。「水道のない東川町」と言う言葉は、水道が当たり前の生徒にはインパクトがあったようである。今年度は、水についての研修として東川町の大雪山系から流れ出る伏流水を利用したわき水について現地の人々の話も交えながら視察することができた。

・ＳＧＨ美瑛研修（8/31、高2…10名）
　豊かな自然やその中で収穫された野菜などを観光資源としている美瑛町で、現地の状況を生の声と共に感じるフィールドワーク。１年生は、人と人の共生、２年生は自との共生をテーマに現地を訪れた。自然との共生だけに取り組んでいるのではなく、あわせて人との共生にも関わっていることを感じるフィールドワークであった。

【海外フィールドワーク】

東京聖心主催	カンボジア体験学習	7/25～8/1	高1…1名
小林聖心主催	フィリピン体験学習	7/18～7/30	高3…1名、高2…1名
不二聖心主催	韓国体験学習	7/28～8/2	高3…1名
札幌聖心主催	オーストラリア姉妹短期交換留学	7/22～8/13	高3…1名、高2…1名
台湾聖心主催	台湾インターナショナルキャンプ	7/31～8/10	高3…1名
札幌聖心主催	シカゴ姉妹校短期留学	9/16～10/8	高1…2名
札幌聖心主催	シアトル姉妹校短期留学	1/ 6～1/28	高1…2名
SGH・NY国連研修（SGH派遣プログラム）		2/13～2/20	高1…10(9)名
札幌聖心主催	フランス姉妹校短期交換留学	1/6～1/28	高2…2名
札幌聖心主催	プリンストン姉妹校(Stuart)短期留学	1/3～1/28	高2…2名、中2…1名
札幌聖心主催	ニュージーランド姉妹校短期交換留学	3/10～4/1	高1…1名、高2…1名

本校を含めた聖心姉妹校主催の海外研修については今次年度よりＳＧＨの活動としての実施を見直し、語学研修や語学研修はＳＧＨとしての探究活動の実践活動を実施せずに、純粋に語学あるいはサマーキャンプでのふれあい、ＪＣＩの活動に専念することとした。前述の研修プログラムに参加した生徒は、ＳＧＨのフィールドワークとして国内研修を含めた他のフィールドワークを選択して現地に行く場合もあるが、現地での活動の狙いが明確になるため調査しやすく、且つ、アクションプランへとまとめやすい研修となった。

④　探究学習：報告会・発表会

高３は「アクションプラン」として、これまで２年間活動してきた「人との共生」「自然の共生」から一つを選択し、解決のための方策や計画、現実的なアクションを伴う活動となる。この学年は、先輩からのサジェスチョンもなく自ら活動を創り上げてきた生徒たちである。昨年度と違うのは、昨年度卒業した高校３年生の活動の様子を目にしていたのでプランを作りやすい面はあったようだ。

年に２回、フィールドワーク参加生徒は、他の生徒への発表の機会が与えられている。フィールドワーク参加機関を前半と後半に分け、前半参加生徒は夏過ぎに、秋と冬の参加者は翌年度の４月２５日に発表の場を設定した。年度末には様々な行事があり、時間がとれないため翌年度４月に実施とした。

今年度は前半の発表の場を活動報告会として２日間に分けて計画し、道内や近隣の方々、保護者にも参加を呼びかけて実施した。

＜実施日＞

・2017年10月6日（金）、7日（土）
　前半夏季休暇中のＳＧＨ研修及び海外体験学習等の研究報告会
　（出席者：道内ＳＧＨ指定校教員、アソシエイト校、保護者、全校生徒）

・2018年1月29日（金）
　北海道ＳＧＨ中間成果報告会、生徒３名参加、道内ＳＧＨ指定校５校の生徒による発表交流

・2018年4月25日（水）
　2017年度後期活動報告会

⑤　課題研究ミーティング

外部講師をお招きし、新たな情報、あるいは様々な角度でのご講演をいただいた後、自らの意見文を書き上げる時間としている。今年度も、高校１年生は年４本、高校２年生は年２本の意見文を書き上げている。途中、いくつかのステップに分け、その都度ステップごとに構成や論理立てなど、個々に指導を受け、客観的・論理的な組み立てとしていく学びの時間である。高１～３までの活動ではあるが、高３は進路のための準備等があり、後半はそこに専念できるように配慮した計画となっている。

今年度の実施状況については以下の内容であった。

・4/17（水）　「福音を届ける記者に」（人間関係分野）
　山本　肇 氏（北海道新聞社NIE推進センター委員）　65名参加

・5/17（水）　「環境衛生課の業務について」（環境科学分野）
　木幡有佑 氏（札幌市保健福祉局環境衛生課営業指導係長）　43名参加

・6/21（水）　「自分の筆で描く魅力」（人間関係分野）
　唐神知江 氏（卒業生）　15名参加

・7/ 5（水）　「SDGsと私たち」（国際文化分野）
大橋正明 氏（聖心女子大学文学部人間関係学科教授）　70名参加

・8/23（水）　「若者の主体性を引き出して、地域課題に取り組む」（環境科学分野）
草野竹史 氏（NPO法人ezorock　代表理事）　42名参加

・10/4（水）　「THINK～自分らしく生きるために～」（人間関係分野）
佐々木理那 氏（札幌市男女共同参画センター指導員、卒業生）　40名参加

・11/8（水）　「ユネスコ活動について～世界寺子屋運動を中心に～」（国際文化分野）
中村康江 氏（札幌ユネスコ協会理事、34回生保護者）　31名参加

・12/6（水）　「自分らしさを仕事に」（人間関係分野）
佐野裕美江 氏（ＮＨＫ青森放送局、卒業生）　42名参加

・1/24（水）　「スローライフとコミュニティレストラン」（人間関係分野）
杉岡直人 氏（北星学園大学社会福祉学部福祉計画学科教授）　24名参加

・2/ 7（水）　「日本は外国人にとって住みやすい国か？」（国際文化分野）
小川早百合 氏（聖心女子大学文学部国際交流学科教授）　26名参加

⑥　論証重視型日本語ディベート

１年生の論証重視型日本語ディベートは４年目となる。論題の設定は、「グローバルイシューズ」で１年生で取り組むメインテーマである「人との共生」に沿ったものとした。

今年度は、１つの論題に対して１回目で肯定側だったグループは２回目に否定側を、またはその逆のパターンで対戦するよう変更した。

中学の国語科の授業でもディベートが取り入れられ、どの生徒も経験済みではあるが、約半年に渡って本格的に取り組むのはほとんどの生徒が初めてである。生徒にとっては手探りで始まるディベートであり、準備の不十分さが目立っていたが、一度指導され後は大きな改善がみられるようになった。また、ディベートそのものの能力を高める以外に、チーム内の役割分担や話し合い、協力し合いながら活動するなど副次的な効果もみられた。国内、海外の様々なテーマを扱うことで、これまで関心の少なかった出来事や問題に目を向けるようにもなった。

⑦　即興性重視型英語ディベート

２年生の即興性重視型英語ディベートは３年目となる。言語は異なるが日本語ディベートとともに論理的思考の側面では共通部分も多い。２年生には、３年生が前年度取り組んできた成果をモデルディベートとして参観する機会が設けられ、英語によるディベートのイメージを持つことができている。また、今年度は英語力によるコース編成をやめ、ディベートを行う際の動機づけへの影響も考慮し、今年度は生徒自身の希望によるコース編成を行い、毎回論題を変えてディベートを行う方をＡコース、１つの論題に数時間かけて立論や反論の準備を行う方をＢコースとした。また、各コースにおけるチーム編成についても変更した。昨年度は初回に決めたメンバーを固定して最後まで行ったが、今年度はメンバーを固定せず入れ替えを行うことで、より多くのメンバーと協力する機会を設けた。さらに、昨年度まではチーム内の英語力になるべく差がないように構成メンバーを決めていたが、英語力のないメンバーどうしによるチームが編成されると、話し合いの段階から意見が出ず困難を極めたため、今年度は各チームに「核」となるメンバーを配置し、英語力も含めて話し合いが成立するようメンバーを構成した。結果としてＡコースには英語力の高い生徒が多く集まった。昨年度の反省から、「論立て」のプロセスに力を入れ、ポイントを選び、定義づけをし、各チーム内でのコミュニケーションを図れるように指導した。

その点において、各チームに一人必ず教師が付き添い、論理的な思考を促したり、適宜アドバイスを与えるように工夫した。回を重ねるごとにディベートの内容、コミュニケーションの濃度は非常によくなっていき、ディベート能力を高め、磨かれていた。また、Ｂコースには英語に苦手意識を持つ生徒が多く集まり、ディベートでは正しく美しい英語で話すことよりも英語で意見を相手に伝えることに重点を置き、身近なテーマ設定とも相まって英語力に不安感を持っている生徒には効果的に作用した。

アンケートの結果から、ディベートを経験することで自分の中での目標値が上がった生徒が多く居り、今後の英語の授業においても相乗効果が働くことが期待できる。

⑧　キャリア教育

今年度は、１０月に聖心女子大学の主催で高校１年生１３名が説明会に参加した。大学の学部紹介や進学についてのガイダンスなどが行われ、ほとんどの生徒がＳＧＨ関連の推薦やＡＯ入試で進学する生徒達に去っては貴重な体験となった。次年度以降は、更に内容を充実する予定である。

⑨　アクションプランの策定と実行

高校３年生は、それぞれの課題に沿ったアクションプランの策定を行い、プランの実現に向けた探究を実施する。その折、教師がメンターとして取り組みの疑問点や解決の糸口を探るためのサポート役となる。アクションの内容は多岐にわたるため、サポート内容も多様である。企業や団体の協力を得られるのはなかなか難しく、個人で支援の物資を調達する方法や、支援物資について市内の高教の施設として例えば小学校の特定学級保護者に寄付の依頼をするなどの活動を行っていた。資金面での調達が難しいようで、各メンターの教師も良い方向へと関わっていたが、保護者や地域の方々が集まる催しのでの「募金活動」という方向からの脱却に苦心していた。

その甲斐あってか、新聞に掲載されたことで、シリアから札幌に逃れてきた方から現地の様子を聞く機会を得ることができた。また、地域FM放送で紹介され、行事にも多くの方々の参加を得たこともあった。生徒達にとっては、アクションプランの広がりを感じる貴重な経験でもあった。

7　目標の進捗状況、成果、評価

５カ年計画の目標は次の３点である。

①　人とかかわる姿勢、新しい経験への勇気等、海外体験・留学参加への意欲を高める。

海外への意識が高い生徒が育っている。ニューヨーク研修に多くの生徒が応募し、留学にも積極的に希望を出している。今年度、参加直前に体調を崩した生徒がいたため、選抜された１０名全員の参加ができなくなったが、大変有意義な一週間を過ごしてきている。

フィールドワークとして海外の研修参加希望も増えている。希望者が渡航定員を上回ることも多い。反面、様々な要因で海外よりも国内を希望せざるを得ない生徒が増加していることも事実である。ボランティアに参加する生徒の人数は年々増加し、延べ人数では高校在籍人数を上回っている。また、近年は、在学中に長期の留学を希望する保護者や生徒も目立ち、昨年は高校で４名の生徒が長期留学で海外の高等学校に通っていた(現在留学中の生徒もいる)が、中学３年での１年間程度の留学を希望する保護者生徒の声もある。

将来の留学や海外の活動希望は高１で８８％、高２で７９％に達している。

②　「課題研究」での大学や専門機関との連携を広げ、国際社会、環境、政治など、広い視点から、より明確なビジョンを持って進路を選択する。

姉妹校の大学や近隣の大学、NGO等から多くの先生にきていただき、貴重な講演をいただいている。札幌在住のシリア人の方の話を聞く機会も得られた。

③　国連やＮＧＯと連携し、人々と共生することの理解を深め、グローバルな問題や課題を見つけ、行動を起こし、更に、将来の様々な職業分野において使命感をもって社会貢献する。

ニューヨーク研修は今年度４年目となる。国連の皆様に多大な協力を得て実現している。参加した１０名(今回９名)の生徒は、比較的温かいニューヨークで貴重な経験を得ることができた。国連ＮＧＯや国連の職員の方々に感謝している。

＜添付資料＞
- 目標設定シート
- 平成29（2017）年度スーパーグローバルハイスクール研究報告書　第4年次
- 平成29（2017）年度スーパーグローバルハイスクール探究学習・活動成果報告書

8　次年度以降の課題及び改善点

・ニューヨーク研修は最も重きを置いているフィールドワークとなる。例年、参加希望が定員を超える。その様子を忖度し諦める生徒もいる。スカイプの活用で、現地と札幌をリアルタイムで交流する試みは双方に意識の高まりを感じた。

・長年実施している「梅干し弁当募金」でチャイルドファンドジャパンに支援をしている。昨年度、支援先のフィリピンを２名の生徒が訪問する機会が与えられた。希望の地域へ行くことができるフィールドワーク実施を検討している。

・国内フィールドワーク研修が新設から３年目となった。様々な家庭状況の中、今年度も国内のフィールドワークへの参加希望が多数あった。探究のテーマによってフィールドワーク先を探すが、東京や道内にも「人」や「自然」との共生に関わるテーマで取り組んでいる会社や自治体、大学がある。それらの組織と連携しながら探究活動を深めていく事が生徒の視野を広げることになる功を奏している。

・ＳＧＨのアクション活動が高校生全員となり、個別・あるいはグループでの活動をサポートする教員が複数必要になる。そのための教員の配置はこれまでにない難しさとなっているが、多くの教員が関わることで、活動の状況や狙い共有することができた。

・海外や国内フィールドワークの充実を臨んでいるが、文部科学省の予算減額が続いているので、保護者一部負担や管理機関の支援で取り組んでいる。

・アクションプランの為に初期投資が必要なこともある。費用調達の為にネット上のグレーゾーンを利用するプランもあり、支援機関のサポートへ関連づけたい。

【担当者】

担当課	札幌聖心女子学院高等学校	ＴＥＬ	011-611-9231
氏　名	藤本　照雄	ＦＡＸ	011-612-0980
職　名	教頭	e-mail	kyoto@spr-sacred-heart.ed.jp

グローバルイシューズの取り組み

高１　フィールドワークと連動した探究学習（人との共生）

Ａ　目的・ねらい

１）生徒が主体的に国際社会及び国内の課題を捉え、それに対しどのように向き合っていくべきかを考察し、実行可能な解決策を打ち出せるようにする。

２）大学等の専門機関や企業等と連携することで、自らの課題設定の妥当性や改善点を知り、より現実的な課題解決能力を身につけられるよう努める。

３）自分の考え・主張を正しく、効果的に他者に伝える能力を向上させ、国際社会で活躍する女性のグローバルリーダーの育成に取り組む。

Ｂ　前年度からの変更点

１）隔年実施のタイ体験学習を加え、フィールドワーク先を４箇所とした。

２）個人による探究報告書作成に向けて、夏期休暇をはさみレポート作成の時間を要した。

３）学年合同ディスカッションとしてフィールドワークごとの分かち合いを発表した後、その枠を取払い新たなメンバーでのディスカッションを行い、自由な意見交換の場を多く設けた。

Ｃ　実施内容

１）上級生からの引き継ぎ
　高校生として初めてとなるグローバルイシューズ（GI）の授業に関して、２年生（代表７名）からガイダンスを受けた。内容は以下のとおりである。

ａ）図書館や情報センターを利用してのリサーチ作業、レジュメ作成について
ｂ）現地フィールドワークについて
ｃ）パワーポイントを使用したプレゼンテーション準備と発表について
ｄ）後期実施のディベートについて
ｅ）課題研究ミーティングの意見文について
ｆ）ニューヨーク（NY）国連研修について
ｇ）高校生としての時間の使い方について

２）各研究テーマで共通した取り組み
ａ）課題設定と調査・研究
　１年生には「人との共生」をメインテーマ、「多文化共生のための地域作りに必要なこと」をサブテーマにした研修を４つ設定した。初めのガイダンスで年間のスケジュール、２年生からの引き継ぎを受けた生徒たちは、自らの興味・関心に問いかけながら自主的にフィールドワーク先を選択した。次回からは、フィールドワークごとの作業となり、生徒一人ひとりに担当教員がつき、テーマの妥当性や進捗状況を随時確認した。
　テーマ決定後は、各自リサーチを行った。リサーチとは、設定したテーマに対する調査・研究のことで、主に学校図書館、情報センターを活用し行われた。
　リサーチにあたっては、調査メモを利用した。調査メモを活用し整理することによって、情報量の確認や管理、取捨選択などが簡潔に行われることを狙った。その結果、情報の管理がしやすくなり、情報をまとめる際に再度調べ直す時間が縮小される。更に使い方に慣れると、全ての情報を書

き写すのではなく、重要なポイントのみを抜き出すことが可能となり、情報を読み取る能力が向上したようである。

b）フィールドワーク

５月以降のリサーチを通して得た課題を持ち、７月から８月にかけてフィールドワークに臨んだことで、自らの耳や目を通してより具体的に現状を知ることとなった。

新たに得た情報や実際に見てきた内容は、校内で行われた研修報告会で全校生徒と共有した。自己完結で終わるのではなく、情報を共有する「分かち合い」を行うことで、現状を広めることや複数で同じ課題に取り組むことが必要であること、一方で対立する意見があることをも知ることができた。

フィールドワーク先と主なリサーチテーマは次のとおりである。

①北海道ニセコ町研修（1日研修）

新しい町づくりに向けての町長の狙いと課題、国内外からの移住の増加、他の町村との比較（教育、観光、農業）等

②北海道美瑛町研修（1日研修）

新しい町づくりに向けての観光と農業の選択・両立、「日本で最も美しい村」連合の働きと効果、他の町村との比較等

③東京研修（2泊3日研修）

チャイルド・ファンド・ジャパン、難民を助ける会、難民支援協会、東京入国管理局を訪問し、貧困国の子どもたちへの援助、日本の難民受入れと支援のあり方、外国人が日本で暮らす条件と手続きの改善に向けて等

④タイ体験学習（7泊8日海外研修）

隣国との国境紛争や人口の流入、国内での政治的対立・宗教対立、国内での少数民族差別と伝統の継承、貧困問題と対策、王室の継承と文化保護、女性の地位と貧困、日タイ関係の歴史とこれから（幼児、高校生、大学生との交流を通して）等

ニセコ

美瑛

東京

タイ

c）ディスカッション

すべてのフィールドワークが終了した後に、各グループごとに「人との共生において必要なことは」をテーマに話し合いを行った。それぞれ２、３の項目にまとめ、その理由を含めて発表することで、すべての分かち合いを学年間で共有することができた。さらに別の時間には、フィールドワークのグループ枠を外し、新たに7、8名のグループを四つ作り、意見交換をした。新たな視点で行ったディスカッションの内容はA4の用紙にまとめ、廊下に掲示し共有した。

これらのディスカッションは、意見を交わしながら合意させることの難しさを知るとともに、別の視点による指摘を通して、新たな解決策を考えだす有効な機会となった。

学年ディスカッションの様子

d）探究報告書の作成

５月からの個人またはグループでの取り組みを報告書にまとめるべく作業を進めた。調査メモ、参考資料リスト、７月の学校祭でのリサーチ発表レジュメ、質問リスト、研修の振り返りシート等すべてを活用しての総まとめとなった。

探究内容、各自で見出した課題とその理由、課題解決策、下級生への引き継ぎ事項等、いずれも高校生として初めて取り組んだ探究課題に一人ひとりが熱心に向き合うこととなった。９月末に提出された報告書は各メンターが目を通し、いくつかの指摘を通して完成に導いた。

D　評価・検証

1）ルーブリック（別添）の結果から

今回の取り組みにおける評価（検証）は、生徒に提示した生徒ルーブリック、指導した教員が生徒を評価した教員ルーブリック及び授業の様子から判断した。集計結果からは以下の傾向が読み取れる。

・項目Ａ「テーマ設定とリサーチ」

必要十分な情報探索、情報の正しい取捨選択、さらに正確な読解への自己評価が比較的高い。しかし、示された情報から問題点を適切に取り出し、追加して収集した情報を問題の解決策として扱うには、まだメンターの援助が必要な生徒が多く、教員側の評価はかなり抑えられている。

・項目Ｂ「発表」

準備においては、調査メモの積極的な活用や視覚に効果的なレジュメの作成など大いに工夫が凝らされ双方の評価が高い。また、小グループ、全体での発表においても自分なりの意見を持ちながら仲間の発表・報告に耳を傾けることが出来ていた。

・項目Ｃ「フィールドワーク」

フィールドワークの最中の段取りや質問については事前準備を万全に行い、互いに補い合いながら実地に当たることが出来ていた。

・項目Ｄ「探究報告書」

今年度初めての試みで、試行錯誤しながら自分なりの研究をまとめようと努めた。しかしながら、事前学習からフィールドワークを経て次の課題を見いだす、または適切な解決策を提示するという

点ではそこまでたどり着けていないという教員側の評価が目立った。
　半期を通して行った初めてのGIの取り組みは、思いの他時間と負担がかかり苦労をした、というのが現実であった。わずかの成長ながら、それらの努力は後期の日本語ディベートやＮＹ国連研修の事前学習に生かされており、さらには次年度以降の研究・調査に生きることと期待するものである。

高１　論証重視型日本語ディベート

【目的・ねらい】

ポリシーディベート（論証重視型・準備型ディベート）を通して、プレゼンテーション能力（論理的にわかりやすく話す力）と課題分析能力（要点を整理しながら聞く力）を育成する。具体的には、理論や根拠に基づき自分の意見や考えを主張でき、また相手の考えや意見に耳を傾け自己のそれとの相違点を意識しつつ、改めて自分の意見を論理的に構築できる力を養うことを目的とする。

【課題と改善策】

２０１６年度は２７人を８つのグループに分け、４つのテーマで実践した。その後同じテーマで肯定・否定の立場を変え実践した。年明けから新たに６つのグループを選定しなおし、「人との共生」をテーマにし、公開ディベートを行った。２０１５年度の反省から実践の回数を増やし、かつメインテーマに合わせた論題を課した。時期を年明けに設定したことで、図書室の資料のやりくりが可能となった。

２０１７年度は２２人を６つのグループに分け、３つのテーマで実践した。今年度は年明けから昨年度と同じ「人との共生」をテーマにし、グループ編成は変えなかった。１回目で肯定だったグループは否定を、否定だったグループは肯定を担当し、対戦の組み合わせを変えて２月１４日（水）に１日で全員が対戦するように設定した。ニューヨーク国連研修と連携した実践をメインとする形としては、１０月からの準備期間も含めて妥当な流れとなったと考えている。

【指導の観点】

・課題に応じ、自分の立場を明確にとらえる。
・適切な情報を取捨選択する。
・その場に適切な語句・表現を選び、相手に伝わるよう効果的に表現する。
・論理的に文章を構成する。
・チームとして協力の姿勢を持ち、話し合いを重視する。
・ジャッジに当たっては、自分の意見ではなく、ディベートを通しての客観的な評価を行う。

【実施内容】

10/18（水）　①シナリオディベート体験
②ルーブリック配布
③グループ発表（３～４人）
④テーマ決定
・積極的安楽死・尊厳死を認めるべきである。是か非か。
・男女間格差を軽減するために、クォーター制を導入すべきである。是か非か。
・赤ちゃんポストを北海道にも導入すべきである。是か非か。

10/25（水）　調査、立論、作戦会議、フローシートの説明
※時間ごとに調査メモ、立論シートの提出を求める。（以降同じ）

11/8　（水）　調査、立論、作戦会議

11/15（水）　調査、立論、作戦会議

11/22（水）　実践１（グループA対B、C・D・E・F観戦）
　テーマ：積極的安楽死・尊厳死を認めるべきである。是か非か。

12/6　（水）　実践２（グループC対D、A・B・E・F観戦）
　テーマ：男女間格差を軽減するために、クォーター制を導入すべきである。是か非か。

12/13（水）　実践３（グループE対F、A・B・C・D観戦）
　テーマ：赤ちゃんポストを北海道にも導入すべきである。是か非か。

1/24（水）　学年共通のテーマ（移民・難民）に対し、調査・立論構成・作戦会議開始

1/31（水）　調査・立論構成・作戦会議

2/14（水）　①特別プログラムとして午前中に２試合、午後に１試合行う。
　※試合するグループ以外の者は観戦またはジャッジを行うものとする。

テーマ１：難民条約の日本の解釈を変えるべきである。是か否か。（グループＦ対Ａ）
テーマ２：日本は外国人技能実習生の受け入れを増やすべきである。是か否か。（グループＢ対Ｃ）
テーマ３：移民と共生するために、日本は外国人の参政権を認めるべきである。是か否か。（グループＤ対Ｅ）

②振り返り、分かち合い
③評価（ルーブリック）

2/17（土）　ニューヨーク国連研修組とSkypeで交流

2/21（水）　ニューヨーク国連研修、日本語ディベートを通して自分たちが考えた共生の形を報告、理解を深める。北海道大学公共政策大学院　池炫周直美先生からご助言をいただく。双方向の交流

2/28（水）　高１ＧＩ全体の振り返り・分かち合いを行い、文章で表す。

【課題】
・情報を適切に取捨選択すること、ネット情報を過信しないことなどがなかなか徹底されない。
・評価ポイント、指摘ポイントを適切につかむことが難しい。相手からの質問に的確に応えることができず、自分の用意していたもので対応することに終始するなど、準備の不十分さが目立ってしまった。
・特に「判定」において、すでに持っている自分の意見に影響されやすく、根拠を意識した意見発表、観点を明確にした評価が難しかった。（一度指導した後は、審判長の力量もあり改善が見られた。）

【改善策】
・感想ではなく、根拠を明確にした話し合いの機会を増やす。
・制限時間内をフルに使って強く主張をする方法を学ぶ。
・日頃からの円満な人間関係、信頼関係の構築を図る。

【成果】

・クラス・学年内の仲間と向かい合い、役割を分担し、話し合い協力し合いながら活動することが日常となった。一人で課題に取り組む際にも、グループで行ったことが応用出来るのではないか。
・ディベートの勝敗によらず、生徒同士で健闘を称えあい、新たな友人関係、信頼関係を築く機会となった。
・国内、海外の様々なテーマを扱うことで、これまで関心の少なかった出来事や問題にも目を向けるようになった。

高２　フィールドワークと連動した探究学習（自然との共生）

Ａ　ねらい・目的

１）１年生で実施した「人との共生」を探究テーマとしたＧＩの取り組みで深めた見識を踏まえ、新たな探究テーマとして「自然との共生」を設定し、探求学習を行うことで共生社会についての視座を高める。

２）担当する探究テーマに関して主体的に探究活動を行い、情報を精査しながら国外も視野に入れた中で課題を見出し、その課題とどのように向き合っていくべきかを考察し、実行可能な解決策を考えていくことで、グローバルな視野を持った思考力・判断力を養う。同時に３年生のＧＩにおけるアクションプラン(課題解決策)の作成・実行につなげる。

３）レジュメや探究報告書、プレゼンテーション資料の作成をグループワークやディスカッションを交えて行うことにより､自分の意見や考えを相手に分かりやすく伝えるための表現力を磨くとともに、他者を理解する寛容性を養う。また、ワープロやパワーポイント、タブレットのアプリケーションなどを積極的に使うことでＩＣＴスキルの向上を図る。

上記１～３を通して、グローバルな視点で持続可能な共生社会に生きる人間として必要な態度とリーダーとなり得る能力を育成する。

Ｂ　実施内容

１）事前準備・意識付け

ａ）１年生へのアドバイス

１年間のＧＩを含むＳＧＨ関連の活動について、ＨＲの時間を使い１年生に対してアドバイスを行った。昨年度も実施しており、先輩からの実感のこもったアドバイスが効果的であったため今年度も実施した。昨年度は項目毎に担当グループを作って準備したため、２年生個々にとっては部分的な振り返りに終わってしまったことから、今年度は２年生全員に全項目についてアンケートをとり、それを代表者が集約し、１年生に伝える方法に変更した。このことにより、１年生にとっては初めて取り組むＧＩに対しての心構えができ、２年生にとっては各自が前年度の取り組みを整理することができ、双方にとって今年度の取り組みの質を高めるための有意義な機会となった。

<u>アドバイスの概要</u>

①リサーチ作業、レジュメ作成について

・情報源は主に本、新聞、ネット　・情報の信用性に注意　・情報の取捨選択
・調査メモの作成　・計画性　・図や表の活用

②フィールドワークについて

・事前準備(基本知識、質問事項)が大事　・資料とは違う理解の深めができる
・自分の担当以外についても関心を持つ(グループとして)　・積極性が必要

③プレゼンテーションの準備から発表までについて

・パワーポイントの分かりやすいまとめ方　・時間の使い方、協力の仕方の工夫

④ディベートについて
・事前準備が重要　・常にグループで情報整理をする　・想定問答をしておく

⑤課題研究ミーティング、意見文について
・後回しにしない　・引用する情報の信用性に注意　・根気強く取り組む

⑥ＮＹ国連研修について
・事前学習が大変　・日常的に情報収集を行う　・積極性、英語力が必要
・忙しいが得るものは多い

⑦時間の使い方について
・計画性(スケジュール管理、後回し厳禁)と臨機応変さが必要
・休み時間や放課後を有効に使う

ｂ）オリエンテーション
ＧＩの最初の時間にオリエンテーションを以下の内容で実施した。

①年間の活動スケジュールの確認
ＧＩはグループワークであり、限られた時間の中で内容の濃い探究学習を行うためにはグループ単位で日々状況に合わせてスケジュール調整をしていくことが重要である。最初に活動スケジュールを提示し、こまめに進度状況の確認を行いながら、自分だけではなく、他のメンバーの状況も把握しながらグループとしてスケジュール調整を行うことを意識させた。

②ルーブリックの提示
生徒に探究学習の具体的な到達目標として、作業行程に対応したルーブリックを提示した。

③探究テーマの説明・希望調査
昨年度に習い、まずグループ探究テーマ(メインテーマ)を決め、その下で個々の個別探究テーマ(サブテーマ)を設定する流れとした。グループ探究テーマは前年度の２年生が設定した４つのテーマを更に掘り下げるために引き継ぐことした。また、今年度はＳＧＨ海外研修として隔年実施しているタイ研修の実施年度であり、「タイ研修(タイの環境問題)」もテーマに加えた５つとした。各グループの担当教員から概要説明を行い、希望調査を行った。

グループ探究テーマ
グループ１　メタンと地球温暖化の関係
グループ２　廃棄物(ホタテの貝殻とウロ)の処理と活用
グループ３　水資源の確保と活用
グループ４　外来生物との共生
グループ５　タイ研修(タイの環境問題)

ｃ）探究テーマ決め

オリエンテーションでの希望調査をもとに若干の人数調整を行い、グループ分けを決定し、グループ探究テーマの下での個別探究テーマを決めた。個別探究テーマは前年度のものを更に発展・充実させるために、担当教員が原案を用意し、それをベースに生徒がアレンジすることとした。

２）活動

ａ）リサーチ

ＧＩのリサーチ活動は前年度も経験しているが、今年度はタブレット配備と、校内のWi-Fi環境が整備されたことでネット情報にアクセスしやすくなり、リサーチの作業効率が上がった。しかし、その弊害として、本による情報収集が全体的に手薄になってしまった。報告書作成のための生徒１人あたりの参考文献数はネットから検索したものが3.7に対して、書籍は1.5だった。本校は中学から図書館の活用に力を入れており、必要とする本の探し方、本の情報のまとめ方なども段階的に指導してきている。またネットよりも本の方が情報の信用性が高いため、リサーチでは本からの情報収集を最優先として指導したが、週１時間という制約の中では大半の生徒が検索が容易なネットからの情報収集になってしまい課題が残った。

ｂ）レジュメ・探究報告書作成

昨年度は個別探究については学校祭の展示発表として中間報告的なレジュメ（Ａ４版１枚）を作成するのみで、その後はグループ単位での研修発表会におけるプレゼンテーションに集約され、個別探究としては中途半端になってしまったため、今年度は個別の最終報告として「探究報告書（Ａ４版３～５枚）」の作成を加えた。報告書の作成においては、調べた事から、見出した課題とその解決策、後輩への引き継ぎ事項についてまとめるように項目や書式を統一した。また、情報の出所を明記すること、図や表を活用して簡潔に分かり易くまとめることを求めた。多くの生徒は中学から調べ学習を繰り返しており、まとめ作業については年々手際がよくなっていた。

１年生のＧＩではレジュメは手書きだったが、２年生ではレジュメも探究報告書もワードで作成することとした。ワープロによるレポート作成は大学や社会で不可欠なスキルであることと、スマートフォンの急速な普及により扱う機会が少なくなっているキーボードに慣れさせる狙いである。個人差があるがワープロに馴染んでいない生徒は手書きよりも工夫が難しく、図表の挿入や全体のレイアウトなどに悪戦苦闘していた。しかし、必要性に駆られながら着実に技術を身につけていった。３年生ではＧＩの他に卒業論文もあり、更にスキルアップするであろう。また、作成データをＵＳＢだけでなく学校のデータベースにバックアップを取るをつけるといった情報管理についても指導した。認識の甘い生徒がデータを間違って消去してしまったときに、バックアップを取っていなかったためにグループの作業がやり直しになった。細かいことだが、こういった失敗からも将来役に立つ大切な学びが沢山あった。

ｃ）フィールドワーク・ディスカッション

フィールドワークもグループテーマ同様に基本的に前年度を踏襲した。フィールドワークに出る前にはグループ単位での事前準備として、学校祭に向けてまとめたレジュメについて発表・意見交換をすることで情報共有を行い、研修に臨むグループとしての方向性を確認し、聞きたいことの洗い出し等をディスカッション形式で行った。実際に現地に足を運び、実物を見ることや、携わっている専門家の話から得られる情報には本やネットだけでは読み取ること、感じることのできない貴重なものが沢山あり、グループと個別の探究テーマそれぞれの理解の深めに大きく役立ち、研修報告会における実感のこもった報告に結びついていた。

なお、昨年度の反省に実施時期は夏休みに入る前が良いという声が多かったため、今年度は夏休み直前の7月18日にできるだけ足並みを揃えて実施することにした（外来生物は研修内容の季節の関係で５月末に実施。タイ研修は募集時から夏休みで案内されている）。

ｄ）研修報告会（プレゼンテーション）

フィールドワークを終えたあとに、グループ探究のまとめとしての研修報告会があり、これまでの個別の調査・探究をグループテーマに基づいて１つにまとめ、全校生徒に向けたプレゼンテーシ

ョンを行った。１グループ約10分間でパワーポイントを使って説明する。個別のテーマをグループテーマでひとつにまとめ直し、図表もあらためて探し、いかに分かりやすく伝えるかを考えながら、リハーサルを重ね、入念に準備した。この作業を通して、自分の研究成果をまとめ直すと同時に、グループで１つにまとめるために、お互いの意見を出し合う中で、リーダーシップ・フォロワーシップが生まれ、グループでひとつの価値観を作り上げる経験をした。また、本校は中学３年生で卒業研究に取り組ませ、論文作成と研究発表まで行っており、この研修報告会でプレゼンテーションを行うことが、中３、高１、高２と段階的にスキルアップさせていく構図にもなっており、発表を見る中学３年生も学年があがる毎にクオリティーが高くなっていることを実感し、自分のモチベーションにも結びついている。

３）各グループの取り組み

ａ）メタンと地球温暖化の関係

①課題設定と調査・研究

昨年に引き続き、地球温暖化に影響を与える物質としてメタンに着目し、調査・研究を進めることとした。調査・研究を進めるにあたり、設定したテーマは右記のとおりである。昨年度の調査・研究テーマと重複しないよう考慮した。

	調査・研究テーマ
1	バイオガス発電はなぜ環境に優しいといえるのか
2	家畜のゲップに含まれるメタンを減らす
3	地球温暖化に影響を与える物質とその排出の抑制策
4	メタンから水素を生成するメリットとデメリット
5	下水処理とメタン、その活用について

今年度このテーマを選択した生徒の中には現高３が昨年度行った研究発表を聞き、二酸化炭素以外の物質も地球温暖化に大きく影響を及ぼしていることを知り、関心を持ってくれた者がいた。

昨年度と比較して調査・研究を進めるうえで改善を図った点は３つある。１点目は必要な資料を図書館に充実させることである。生徒はインターネットによる情報検索に頼りがちである。高１で既にその点については嫌というほど指導を受けているはずだがやはり、簡便さという点においてインターネットに依存しがちである。インターネットを活用することは悪いことではないが、そこにある情報の真贋を確かめるが充分に養われているとは言い難い面もある。そこで、インターネットによって得た情報は図書資料でも確認が取れるかどうか徹底するよう指導した。２点目は偶然に過ぎないことでもあるが、メンターとなる教員が昨年度と変更がなかったことである。メンターとなる教員が調査・研究テーマに精通しているとは限らないこともあり、一年目の指導には苦労することも多い。継続することで指導に対するノウハウや知識を蓄積し、生かすことができたことはよかったと言える。３点目は生徒の「主体性」を生かすよう工夫したことである。生徒に対して事細かにあぁしなければ、こうしなければと指導することはＧＩの趣旨に反する。一方で全く「自主性」に任せてしまえば、一向に調査・研究が進まなかったり、深化が図られないなどの懸念も残る。そこで、調査・研究内容を文書にまとめて定期的に報告を求めることとした。明らかな間違いについては指摘するが、もう少し調査・研究を深く掘り下げた方がよいと判断される点や根拠を明確に示す必要がある場合には、言葉でずばりと指摘するのではなくメンターが何を求めているのかを自分で解釈・判断できるよう仕向けられるよう指導上の工夫を行った。このような指導には大変時間がかかるが、繰り返すうちに生徒の方でもどこまでのレベルを要求しているのかが分かるようになり、調査・研究が進むにつれて意図したことが達成されるようになってきていた。

②外部講師による講義

６月８日（木）に開催した。札幌市環境審議会会長の松田從三 氏を講師としてお迎えし、これまで研究に取り組まれてきたバイオガスの活用について、理科系が得意ではない生徒にも理解出来るよう工夫された講義をしていただいた。当初は調査・研究が始まる前にメタンと地　球温暖化の関係に関する講義をお願いしようと計画していたが、日程上それが叶わなかった。しかし、結果としてはそれが功を奏した面があった。ある程度生徒の方で調査・研究が進んだうえで行われたため、調査・研究中の内容について生徒自ら積極的に質問が出された点で大変良かった。また、その質問から派生して、北海道とそれ以外の都府県ではバイオガスの活用について異なる点があることなど新たにご教授いただけたなどこれ以降の調査・研究を進めるうえで有意義な提案をいただくこともできた。

③レジュメの作成

学校祭にて個々の調査・研究内容を他の生徒や保護者、一般の来場者に広く知ってもらう目的で例年通りレジュメの作成を行った。前期末に「探究報告書」を提出する前提で調査・研究が進められてきているため、レジュメの作成にあたってはそれらの内容から必要かつ最小限の情報を取り出し、なおかつメタンと地球温暖化の関係について全く知識がなくとも読めば理解してもらえるよう工夫することを求めた。とかく説明の文章が長くなりがちであることを簡潔にすることや、専門的な用語を避けるなどについてあらかじめ提示した。

④ディスカッション（事前・事後）・フィールドワーク

個々の調査・研究内容を共有する目的でフィールドワーク前にディスカッションが行われた。個々のテーマが関連性のあるものとはいえ、自分で調べた内容以外のことについては門外漢であることも多い。そのような中においても、ある程度共通性のある内容を学んでいるからこその質問がいくつも出されていた。質問されたことについて回答できなかったものについては、フィールドワークの中で答を見出すか、フィールドワーク後の夏季休業中に調べておくこととした。そして、夏季休業後に再度行われるディスカッションの際に回答することとした。

フィールドワークは７月２１日（金）に実施した。今年度は外部講師としてお招きした松田先生のご紹介で最新のバイオガスプラントを建設・稼働させている江別市の有限会社小林牧場と、メタンから水素を取り出し、活用に向けた実証プラントを稼働させ始めた鹿追町環境保全センターを訪れた。

訪問場所	フィールドワークの主な内容
有限会社小林牧場 （江別市）	最新のバイオガスプラントの見学 バイオガスプラント建設の目的と効果について説明 バイオガスプラント導入に伴う副次的な効果について説明 悪臭対策と都市化が広がる周辺地域との共存について説明 質疑・応答
鹿追町環境保全センター （鹿追町）	バイオガスプラントの見学 水素抽出施設の見学 廃熱利用施設の見学 鹿追町のバイオガスプラントの特徴と設置の意義について説明 バイオガスプラントから出る廃熱の活用について説明 水素を抽出する目的とその活用、将来性についての説明 質疑応答

小林牧場では、昨年度訪問した江別市の町村農場と同様、家畜の糞尿処理が大きな課題となっていた。バイオガスプラントの導入で売電による収入を得られることや、都市化が進む周辺地域との間で問題となっていた悪臭対策も解決されたなどの説明を受けた。売電せずに牧場で使わない理由は何かという質問が出され、それに対し「売電による収入」＞「電力会社から購入する料金」というからくりがあることが提示された。また、副産物として生じる「消化液」なるものが一戸あたりの面積が広大な北海道の酪農家では活用されるが、小規模な酪農家が多い本州では活用先が限られることなど提示された。いずれも生徒たちにとっては目からウロコのような事柄であり、机上での調べでは得られない情報を得られることがフィールドワークの醍醐味であることを実感していた。

小林牧場　フィールドワーク①

小林牧場　フィールドワーク②

鹿追町環境保全センターでは、稼働しているバイオガスプラントには町内の中心街周辺にある限られた酪農家からのみ家畜の糞尿が搬入されていると説明があり、これもまた大きな驚きであった。その理由については生徒の方からいくつかの質問が当然のごとく出されていた。担当職員の方の説明を聞くことで初めて、都市部とそれ以外の地域の酪農家が抱える問題に違いがあることに生徒達は気付かされていた。また、バイオガスプラントから出される廃熱を利用して町の新たな産業振興に向けた様々な取り組みがなされていることに関心をもったようであった。

夏季休業明けには事後学習としてのディスカッションを行った。この場でもあらためてフィールドワークの有効性について生徒から声が上がっていた。フィールドワーク前にまとめたそれぞれの調査・研究内容にフィールドワークで得た知見を加味し、探究報告書を完成させることを確認した。

鹿追町環境保全センター　フィールドワーク

鹿追町環境保全センター　フィールドワーク

⑤探究報告書の作成

昨年度の反省を踏まえ個々の探究学習の成果を形として残すことや、下級生への引き継ぎ資料として残すことを目的として作成することとした。フォーマットは高２のＧＩ全体で統一されている。限られた分量で表すことに大変苦労していたようであるが、その成果は別冊をご覧いただければ幸いである。

ｂ）水資源の確保と活用

①課題設定と調査・研究

水は日々の生活に欠かせないものであり、重要な資源である水がどの様に手元に届き、かつ活用されているのかを調査した。また日本国内、国外の状況についても比較検証し、日本の水資源が他国に比べて豊富かつ安全であることを学ぶ機会となるようにした。昨年度の２年生が同じテーマを扱った際に、仕上げのフィールドワーク先として予定していた東川町が直前に台風による災害に見舞われ、研修受け入れが不可能になってしまった。そのため急遽札幌市内の施設見学に変更した。今年度は昨年度の仕切り直しの意味もあり、同じテーマ設定から始めることにした。

	個別探究テーマ（サブテーマ）
1	ダム建設の自然環境への影響
2	“自然との共生”における水力発電の可能性
3	ペットボトルの功罪
4	自然災害時におけるダムの役割
5	安全な水を確保するための技術
6	世界の水事情

②フィールドワーク

フィールドワークは昨年度行けなかった東川町を改めて訪問させていただいた。最初に訪問した町役場ではまず、昨年度の台風の被害の大きさからの復旧までの様子を教えていただき、次に大雪山の雪解け水の活用により北海道で唯一上水道がない町である東川町の取り組みについて聞かせていただいた。雪解け水の活用は米や野菜などの食物の品質アップにまで及んでいるなど、その恩恵の大きさ知ると同時に、生活に及ぼす水の影響の大きさを感じることができた。次に雪解け水の資源活用（ペットボトル製造）のために第３セクターとして造られた大雪水資源保全センターを訪問し、大雪の水はフィルターがほとんど汚れないほど不純物が少なく、そのためほとんど味がないことや、災害時の支援物資としての活用も考えてここが設立されたことなどいろいろな切り口から話を聞かせていただいた。最後に訪問した忠別ダムでは、掘り出した土をそのまま堤防に使うなど様々な環境への配慮がなされており、果たす役割も洪水調節から発電まで多目的であり、地域住民の生活を守るために大切な役割を果たしていることを聞き、ダム建設に否定的な考えを持っていた生徒は単純に言い切れないと認識をあらためていた。

この３つの施設での研修から、「資源としての水」の大切さや「自然との共生」の課題について様々な角度から学び深めることができ、非常に有意義であった。

実施日	実施場所	実施内容
7/18（火）	東川町役場	東川町の取り組み、昨年度の台風について
	忠別ダム	ダム施設の見学、説明
	大雪水資源保全センター	良質な水資源、ペットボトルの製造工程

③次年度に向けた改善点

ア）水は人々の生活において、多岐に活用されるものであり、課題も多い。そのため、切り口が多い上に、調べるほど課題が出てくるテーマである。生徒に課題を設定させる場合、今年度分類した４つのテーマをさらに絞ってもよいかも知れない。（昨年度からの反省だが、東川研修が実施した上で再確認）

イ）フィールドワークの事前学習はディスカッション形式の１時間だけだったが、もう１時間使い予備知識を深めることができると、より中身の濃い学びができたように思う。

ｃ）廃棄物の利活用

①課題設定と調査・研究

廃棄物のリサイクルを考えるにあたり、「ホタテ貝殻」の再生活用に着目し、主成分である炭酸カルシウムという物質の特徴を活かしながら「チョーク」や「土壌改良材」へと新たな価値を生み出す過程の調査・研究を進めた。そして、ホタテ貝殻の有効利用を促進することで産業廃棄物の量を減らすことに繋がるきっかけを見出し、課題解決に向けたアクションプランを設定した。

	個別探究テーマ（サブテーマ）
1	海洋資源の利用（世界と日本の実践例）
2	廃棄物の処理と利用
3	ホタテと人との関係
4	ホタテを食用としている日本以外の国では、貝殻をどのように再利用しているのか
5	チョーク以外にホタテの貝殻の炭酸カルシウムを有効活用できないか
6	ホタテ貝の「ウロ」の有効活用
7	貝殻廃棄物の有効活用
8	排泄物の自然への還元
9	チョークの素材として、多種の貝殻で代用ができないのか

②フィールドワーク

ホタテ貝殻から抽出した成分より、生徒にとって学校生活で馴染み深いチョークの製造過程を視察するためにチョーク製造販売に大きなシェアを持つ「日本理化学工業（株）」の美唄工場を訪問した。

廃棄物から新たな価値を生み出すというチョーク開発の企業理念やそこで働く人々の信念にも共感しながら、活発に質疑を行い、廃棄物に関する問題意識や課題解決能力を高める充実した機会となった。
　フィールドワーク後は、そこで学んだことをメンバー各自が振り返り、グループで感想を述べ合い、事前のリサーチ内容と比較検討することで「探究報告書」や研修報告会のプレゼンテーションの内容を深めることができた。

実施日	実施場所	ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ	実施内容
7/18 （火）	日本理化学工業 株式会社	西川　一仁 （工場長）	・企業理念（知的障がい者雇用） ・ホタテ貝成分の化学的知識と再利用価値を説明 ・チョークの製造過程の説明、工場内見学

③次年度に向けた改善点
　ア）「廃棄物」のリサイクル有効利用を「ホタテ貝」を資源として実践する過程を調査・研究したが、チョーク以外に食品や薬品などさまざまな分野に活用されていることについて、書籍からでは調べにくく、インターネットの膨大な情報量から抽出していく作業や科学の専門用語を理解することに困難を感じた。そこで、実地見学が有益であると考え、フィールドワーク先の候補地を広げていけるように働きかけていきたい。

　イ）「廃棄物」というテーマの大枠は、さまざまな題材に広がってしまうことになりかねない。今年度はホタテ貝から創造する「チョーク」に絞ったが、他の題材にも着目し、可能な範囲でリサーチ、アクションプランの策定に取り組んでみてはどうかと感じた。

ｄ）外来生物

①課題設定と調査・研究
　外来生物との共生を考える前提として、どのような問題が起きるか(捕食、競合、交雑、感染)、どのような影響が心配されるか(生物多様性への影響、農林業・漁業、人間の健康への影響)が、グループとして網羅されるように配慮し、調査テーマを設定した。また、調査・研究する上で次のＡ～Ｆの取組が含まれるよう指導した。外来生物グループの人数が昨年より少なく、個人の興味関心を優先した選択となった。

調査テーマの分類　　Ａ：外来生物法の施行状況に関する取組
　　Ｂ：導入阻止に関する取組
　　Ｃ：非意図的導入に関する取組（バラスト水・雑草等を含む）
　　Ｄ：国内外来種に関する取組
　　Ｅ：定着した外来種の防除に関する取組
　　Ｆ：普及啓発に関する取り組み

	個別探究テーマ	調査分類
1	外来生物が引き起こす問題	A、E
2	外来生物が在来生物に与える影響	C、D
3	外来生物との共生を考える	C、E
4	北海道の外来生物対策の特徴	A、F

②フィールドワーク

昨年の反省をうけ、普及・啓発以外のアクションプランにつながっていけるよう、身近な外来生物１種に焦点をあて、セイヨウオオハナマルバチの駆除活動を行っている恵庭市「えこりん村」（株式会社アレフ）をフィールドワーク先として選んだ。セイヨウオオハナマルバチの繁殖活動時期にあわせて、5月31日の実施となった。

まず、セイヨウオオハマルハナバチについての説明を受けた。トマトなどのハウス栽培で花粉を媒介させるために、北海道では（株）アレフが初めてヨーロッパなどから導入したそうだ。その結果、ハウスから逃げ出し野生化した個体による生態系への悪影響が懸念されている。例えば、餌の競合などによる在来マルハナバチの駆逐、在来マルハナバチに花粉の媒介を依存する在来植物の健全な繁殖の阻害などだ。ここ恵庭で食い止めないと、日高山脈を越え全道に広がってしまうため、導入した企業の責任として、捕獲活動・啓蒙活動を続けているとのことだった。パペットなどを使い、セイヨウオオハマルハナバチによる盗蜜の方法などを生徒たちにわかりやすく説明していただいた。

その後、捕虫網、捕獲びんを持ち、捕獲実習を行った。１時間半程度で、一人当たり女王蜂２匹、ワーカー３匹程度を捕獲した。最初はハチの動きに対処できず逃げられ続けたものの、慣れてくると女王とワーカーを見分けることができるようになったようだ。日光の当たる中、屋外で一匹一匹地道に捕獲することで、外来生物を導入した後の大変さが身をもってわかり、「外来生物を入れない」という対策の重要さも理解したようだ。

午後は、（株）アレフの環境への取り組みについて講義をうかがった。『「食」という字は「人」を「良」くすると書く』に表された、食材の生産段階である農業、その生産現場を取り巻く環境にさかのぼって研究・実践してきた企業活動の広さに、生徒は驚きを隠せなかった。

実習フィールド	内容
銀河庭園	外来種セイヨウオオハナマルバチについて講義
	外来種セイヨウオオハナマルバチ捕獲実習
森のレストラン天満	地産地消の食材で昼食 リサイクル（生ごみ堆肥化、食用油を暖房に・BDF 化） 自然採光・屋上緑化の建物
花の牧場	（株）アレフの環境への取り組みについて 説明・質疑応答
とまとの森	1個の種子から育て１万個以上の実をつけたトマト 見学・説明

③ディスカッション

『外来生物の課題についてアクションプランを考える』をテーマとした。生徒が考えたアクションプランは、以下の２つである。

・幼稚園、小学校に出前授業をする
　紙芝居、パペットなどを利用して、子どもにわかりやすく伝える

・駆除活動を行いその後食べる機会を通して学ぶ活動をする
　セイヨウオオハナマルバチ（ハチミツ、ハチノコ）、セイヨウザリガニ、ブラックバスなど

まず、外来生物被害予防三原則「入れない・捨てない・広げない」についての、自分たちの幼少時の経験を共有することからはじめた。お祭りで買ってきたミドリガメを公園の池に放した友人がいたことや、小学校で飼育していたザリガニを夏休みに自宅に持ちかえったがいつの間にか逃げ出してしまったことなど、当時はまったく意識せずにした行動が、実は三原則に反しており、その結果生態系を乱す原因になっていた。外来生物について学習する機会が小学生のころにあれば、自分たちの行動も変わっていたかもしれないということから、アクションプランを考えはじめた。

また、（株）アレフは企業のＣＳＲとして教育体験プログラムを行っている。自分たちが行うのならどうしたらいいのかと考え、セイヨウオオハナマルバチの蜜を売り、その費用で駆除活動をしたらいいのではないかという案を考え付いた。また、たまたま教員がセイヨウザリガニを食べるパーティーに参加した経験があり、その写真等を見ながら話が進んだ。人間が導入して人間が駆除するという一方的な関係だけではなく、「駆除する必要があるものは駆除するが、駆除したあと食べられるものは責任もって食べる」という、生命を大切に扱うという視点からの案も出された。

④次年度にむけた改善点

アクションプランとして生徒があげたのは今年度も啓発・啓蒙活動であったが、話し合い中に「行動によって学ぶ」という観点が出てきたのが良かった。現場に行き当事者の話を伺うことも大切だが、そこに加えて生徒自身が行動する活動を設けることで、もう一歩進んだ学びが得られるのだと感じた。

今回はフィールドワーク先の担当者に恵まれた。熱意をもって取り組んでいる大人に接することは、生徒によい影響を与える。公の機関ではなく、企業として取り組んでいる現場を見たということも、他人事ではなく「自分たちができること」として考えるはたらきかけになったと思われる。（株）アレフの取り組みは多岐にわたり、食から環境につながる研究実践が多々ある。日頃身近なハンバーグ屋さんが、実は環境活動に熱心なところであったというのは生徒に大きな驚きを与えていた。

来年度以降もできれば民間のフィールドワーク先を選べたらよい。営利企業でありながら環境問題にも取り組むという場を知ることが大切である。生徒の将来の消費行動がかわるきっかけの一つとなってほしい。

高校生女子にハチの捕獲はきつかったか、という思いはある。第一希望での選択者がいなかった。（アライグマの捕獲ブームも去り）札幌近郊で夏休み前までに体験できるところという条件が厳しい。今回、このフィールドワークの場とした「えこりん村」をどのように探したかについては、担当者が知っていた外来生物の駆除活動の中から生徒が参加可能なところを次のように絞り込んだ。

北海道庁オオマルハナバチバスターズ（環境生活部環境局生物多様性保全課）
→北海道自然環境保護財団
→（株）アレフ
→えこりん村

えこりん村は中身のプログラムもこちらに合わせて組んでくれ、フィールドワーク先として妥当だと思われる。外来生物以外のテーマ（バイオガスプラント等）も対応可能ということである。

Ｅ）タイ体験学習

①課題設定と調査・研究

タイ体験学習は隔年で実施されている本校の海外体験学習の一つである。１年生と２年生が参加し、それぞれが課題を持って調査・研究を行い、フィールドワークにでかけた。なお、１年生でタイ体験学習に参加する生徒は「人との共生」、２年生で参加する生徒は「自然との共生」を主体とし、訪問先に合わせた課題設定を行っている。そのため、タイ体験学習の参加者は、異なる学年でも訪問先は同一である。

２年生の課題設定は、マングローブの植樹体験を行うことからマングローブに関するもの、またホームステイや日常生活でも見ることの可能な環境問題について取り上げた。調査・研究した内容はグ

ループ全体で発表会を行い共有した。

	個別研究テーマ（サブテーマ）
1	エビ養殖と日本人の消費
2	マングローブの機能（役割・防災・生物との関わり）
3	日本のマングローブ（必要性や植林活動、生態）
4	マングローブの育つ環境と植林後の様子
5	マングローブの製炭材としての利用や農地活用の影響及び改善策
6	チャオプラヤ川の水質汚染とその原因（処理方法も含め)）
7	チャオプラヤ川の活用、タイ人にとっての川
8	空気汚染の原因とその実態
9	都市のゴミ問題（仕組み、改善策、意識）
10	タイでの日本の環境問題への技術支援（企業、政府）

②フィールドワーク

タイ体験学習は８日間の行程で行われた。プログラムには、マングローブの植樹以外にも、現地の高校生との交流、ホームステイ、スラム街訪問、アユタヤ史跡見学、大学訪問、寺院見学などがあり「人との交流」「自然との交流」を学ぶことのできる内容であった。

マングローブ植樹の際に、植樹場所までの移動にガソリンエンジンが使われていることに気がついた生徒達は、「自然を植えに行っているはずなのに、ガソリンエンジンを利用することで、自然を破壊する一因にもなってしまっている」という新たな課題にも気がついた。帰国後、ディスカッションを行い、その解決策について検討が行われた。

個別研究テーマのうち､チャオプラヤ川についてはアユタヤ訪問の際に間近に川を見ることができ、空気汚染・ゴミ問題については町中を歩くことで学ぶこともできた。また、ホームステイなどを通じて現地の方から話を聞く機会をもつ生徒もいたようである。川の水の汚れ具合や、ゴミが道ばたに落ちている様子など、日本との環境の違いにも気がつくことができるフィールドワークになった。

③次年度に向けた改善点

ア）マングローブの植樹場所は隔年ごとに変更になっている。これまで体験に参加した卒業生達が植えたマングローブがどの様に生育したかをみることができない。見ることができれば、植樹した意味をもう少し具体的に捉えることが可能かと思う。

イ）現地のガイドに直接マングローブやゴミ問題について質問する生徒がいるほど熱心に調査していた。一方で、マングローブについて現地でレクチャーを受ける機会がなかった。今後、その様な機会があることが望ましい。

C　評価・検証

生徒および指導教員によるルーブリック評価（資料高2-A）を実施。比較検証した。

1）リサーチについて（１点～５点）

	生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
情報検索	４．１８【８３．６％】	３．５３【７０．１％】
情報の取捨選択	４．４２【８８．４％】	３．１５【６３．０％】
調査メモ	４．４２【８８．４％】	４．１５【８３．０％】

３項目とも生徒の自己評価が教員よりも高い。特に「情報の取捨選択」の開きが大きい。集めた情報について、必要性や信憑性を検証するときの判断基準に温度差があることが分かる。探究学習においてメディアリテラシーは不可欠であり、今後の指導に留意が必要である。

2）レジュメの作成について（１点～６点）

生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
４．３３【７２．２％】	４．１５【６９．２％】

高１では手書きだったレジュメ作成が高２ではワープロでの作成となった。書式設定などで苦労する場面も多かったが、様々な場面でパワーポイントを使ってきているため、順応が早く、多くの生徒がレイアウトを工夫し、図表を効果的に使うことができるようになり、教員評価でも４を越ええており、ねらい・目的の「ＩＣＴスキルの向上」に関しては一定の成果を挙げることができた。

3）フィールドワークに関して（１点～４点）

	生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
聴く姿勢	２．４２【６０．５％】	３．４４【８６．０％】
質問	１．９４【４８．５％】	３．２６【８１．５％】

２項目とも生徒よりも教員の評価が高い。生徒は自分の取り組みの反省による絶対的な評価として点数をつけた一方、教員は過年度との比較による相対的な評価で点数をつけたと思われる。

4）ＧＩ報告書の作成とグループ発表に関して（１点～６点）

	生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
ＧＩ報告書の体裁	４．３０【７１．７％】	４．３８【７３．０％】
ＧＩ報告書の内容	４．３０【７１．７％】	４．０９【６８．２％】
グループ発表	４．７５【７９．２％】	４．８８【８１．３％】

生徒と教員の評価がほぼ一致。特にプレゼンテーションの評価となる「グループ発表(の自分の担担当)」は生徒も教員も高い評価をつけており、今年度の目標のひとつであった「自分の意見や考えを相手に分かりやすく伝えるための表現力」について、ある程度の成果が得られた。

5）全体評価（Ａ～Ｅの評価を６点～１点に換算）

生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
５．５５【９２．５％】	４．８２【８０．３％】

総合評価としては生徒の自己評価は５を越えており、生意識面においては、ねらい・目的の「共生

社会についての視座を高める」ことは達成でき、④のグループ発表の取り組みの高評価などからも「グローバルな視点で持続可能な共生社会に生きる人間として必要な態度」の育成としては前進できた。ただし、①と③での生徒と教員評価の対称的な表れ方から、自分に自信が持てず積極性に欠け、得られた情報を安易に信じやすい傾向が伺え、「リーダーとなり得る能力の育成」としては課題が残った。

高２　即興性重視型英語ディベート

Ａ　目的・ねらい

即興型英語ディベートを通して、次の５つの力を育てることを目的とする。

①「読む」のではなく、即興で用意した考えを英語で話すことによる英語での発信力。
②自分の意見を整理し、聴衆を説得することによる論理的思考力。
③さまざまな分野の論題を議論することによる幅広い知識。
④聴衆を意識した話し方を工夫することによる表現力。
⑤チームで協力して活動することによるコミュニケーション力。

なお、ここでいう即興型ディベートとは大阪府立大学の中川智皓助教が主管する一般社団法人パーラメンタリーディベート人財育成協会が推奨する、学校の授業において英語でディベートを行うためにパーラメンタリーディベートのやり方をアレンジしたものである。

Ｂ　実施内容

１）オリエンテーション

「英語表現Ｉ」および「英語表現 II」の授業で準備型英語ディベートを経験した生徒が全体の３割ほどいたので、準備型英語ディベートと即興型英語ディベートの手法や得られる力の違いについて触れながら即興型英語ディベートとは何かという説明をした。

前年度まではコースを英語力によって教員側で分けていたが、実際にディベートを行う際の動機づけへの影響が大きいため、今年度は生徒自身の希望によるコース分けを行った。コース名も昨年度までの発展、標準という名称を改め、毎回論題を変えてディベートを行うＡコース、１つの論題に数時間かけて立論や反論の準備を行うＢコースの２つとした。

また、チームについても、昨年度は初回に決めたチームで最後まで行ったが、今年度はチーム替えを行うことで、より多くのメンバーと協力する機会を設けた。さらに、チームのメンバー構成について、チーム内の英語力をなるべく差がないようにするとお互いにストレスが少ないという中川助教の助言により、そのようにチーム構成をしていたが、チーム内に英語力のないメンバーが揃うと話し合いの段階から意見が出ず困難を極めたため、今年度は各チームの核となるメンバーを配置し、話し合いが成立するようメンバー構成を行った。

昨年度はオリエンテーション時に高校３年生によるモデルディベートの見学を行ったが、それを見た高校２年生は、即興で英語で議論する上級生に圧倒され、漠然とした不安感を募らせる結果になったことから、今年度は初回をオリエンテーション、２回目をモデルディベートの見学とし、初回のオリエンテーション時にモデルディベートで扱われる論題についてグループでキーワードを出し合い、モデルディベートで論ぜられるであろう内容や流れについて確認を行った。

また、前年度はこの授業に大きなプレッシャーを感じる生徒が多かったことから、初回に行うアンケート用紙に即興型英語ディベートを始めるに当たっての心境を自由に書く欄を設けることで、不安感を取り除くようつとめた。

２）高校３年生（上級生）によるモデルディベートの見学

昨年度、即興型英語ディベートを学んだ高校３年生の代表者２チーム６名に “All the courses should be offered in English at universities in Japan. （日本の大学のすべての授業は英語で行われるべきである）” という論題でディベートを行ってもらい、全員で見学をした。

昨年度は教員１名がジャッジを行ったが、今年度は教員３名がジャッジを行い、試合後に、勝敗を決めた理由、それぞれのチームの良かった点を詳しく説明した。

３）ディベート

【Ａコース】 このクラスは上級者向けのコースとして、最初からディベートを実戦で戦うことを前提に、このクラスを希望した者、あるいは教師側がこちらのクラスに入る実力があると判断した生徒たち14人で構成された。14人で4チームを作成したが、英語力、総合的なディベート力、そしてそれぞれの性格を配慮し、ばらつきが出ないよう、担当教師間でミーティングを重ね、円滑に論立て、ディベートと進行できるよう、チーム編成を配慮した。昨年、活発なディベートを促すということに力を入れすぎて、その前の段階の「論立て」の指導が手薄になってしまったという反省から、今回は「論立て」のプロセスに力を入れ、クラス内オリエンテーションを設け、ポイントを選び、定義づけをし、チーム内でのコミュニケーションを図れるように指導した。その点において、各チームに一人必ず教師が付き添い、論理的な思考を促したり、適宜アドバイスを与えるように工夫した。必ずしもすべての生徒に指導が必要というわけではないが、自信のなさからプレッシャーを感じ、チームワークを重圧と感じてしまう生徒には、有効な対処法であったかと思う。また、「実戦優先主義」とともに、「peer review（見ることによって学ぶ）」もディベートには有効であると判断し、ほかのチームのディベートを見る機会も積極的に取り入れるように心がけた。あくまでもディベートはチームプレーであり、チームとして方向性を決め、意見を統一し、共同で作戦を立て、わかりやすく相手に伝える、ということをこのクラスの目標として、常にそれを意識して論立て出来るように助言することを第一目的として指導に当たった。

<u>Debate topics</u>

・All the courses should be taught in English at universities in Japan.
　日本の大学のすべての授業は英語で行われるべきである。
・Single-sex schools are better than co-educational schools.
　共学の学校よりも、男子校・女子校の方がよい。
・Domestic travel is better than traveling abroad for a school trip.
　修学旅行は海外より国内の方がよい。
・University entrance examinations should be abolished.
　大学入試は廃止するべきである。
・We should make it mandatory for elderly citizens to return their driver's license.
　高齢者の運転免許の返納を義務化するべきである。
・Idols(pop stars) should be prohibited from having romantic relationships.
　日本のアイドルは恋愛禁止であるべきだ。

毎時間、最初にトピックを発表し、単語シートを配布し、全員で一度練習した後、肯定、否定を決定の上チームに分かれ、15分間の論立てを経て、ディベートの実践。最後にジャッジから勝敗の発表、感想をのべ合う時間を持って、授業終了という流れで進行した。回を重ねるごとに、ディベートの内容、コミュニケーションの濃度は非常によくなっていったように思う。

【Ｂコース】 昨年度は、実際のディベートを行う前の練習として、「Triangle Debate」という形式のディベートを行ったが、この形式は個人戦であることから、チーム戦である即興型英語ディベートのスタイルに直結しないため「Triangle Debate」は行わないこととした。そこで、今年度は段階を追って徐々に即興型ディベートの形式を学び、最終的に即興型ディベートの形式でディベートができるように次のような練習方法をとった。

第１段階　Speaking and Listening Practice
　論題：“Three things I cannot live without.（なくては生きていけない３つのもの）”
　　・メモを見て英語で意見を述べる。
　　・１分以上英語で話し続ける。
　　・相手の英語によるスピーチを聞き、メモを取る。
　　・相手のスピーチが聞き取れない場合に、英語で質問をする。
　　・書き取ったメモをもとに、相手のスピーチを他のグループメンバーに英語で伝える。

第２段階　Pre-debate Practice (1)
論題：“School lunch is better than a homemade bento lunch.”
・パートナーとブレーンストーミングを行う。
・サインポストを２つ英文で作る。・立論を立てる。
・２分以上英語で立論を述べる。
・相手チームの立論を聞き、メモを書き取る。
・相手チームの立論に対して、英語で質問をする。

第３段階　Pre-debate (2)
論題：“High school students should take part-time job.”
・肯定側は論題に対する定義を決める。
・反論の予想を立てる。
・３分以上の英語で、立論、反論を述べる。

第４段階　Debate
論題：“We should abolish the exams.”
・一般社団法人パーラメンタリーディベート人財育成協会の全国大会で行われているものと同じ形式でディベートを行う。
・第３段階の Pre-debate 実践時に、反論のためにチームで話し合う時間がほしいという声が生徒たちの中から出てきたため、各スピーチ後に１分間のチームタイムを入れた。

このコースは英語に苦手意識を持つ生徒が多いため、ディベートは正しく美しい英語で話すことよりも、英語で意見を相手に伝えることに重点をおくよう指導を行った。

C　評価・検証

１）ルーブリックによる評価

即興型英語ディベート能力を測るためにルーブリック評価による生徒の自己評価および教員による評価を中間期（冬休み前）と最終回の２回行った。

生徒による自己評価

		中間期（12月）				最終回（2月）			
	項目	3	2	1	0	3	2	1	0
内容	主張に理由があったか	15%	64%	21%	0%	26%	59%	15%	0%
	反論（相手チームに対する反応）があったか	9%	55%	30%	6%	21%	53%	21%	6%
	定義ができたか（PMのみ）	27%	55%	18%	0%	36%	36%	24%	4%
	例やデータを用いて、十分に説明をしているか	9%	58%	27%	6%	26%	50%	24%	0%
	POIで積極的に議論しているか	12%	6%	15%	67%	6%	21%	38%	35%
表現	はっきりとわかりやすい言葉で話しているか（声の大きさ、スピード）	9%	70%	21%	0%	15%	50%	35%	0%
	Non-Verbal Expressionで聴衆を意識しているか（アイコンタクト、身振り手振り）	9%	27%	55%	9%	12%	35%	50%	3%
	構成はわかりやすいか（論点の順番、ナンバリング、サインポスト）	9%	52%	36%	3%	18%	56%	26%	0%
	スピーカーの役割を果たしているか	18%	39%	42%	0%	12%	56%	29%	3%

教員による評価

	項目	中間期（12月）				最終回（2月）			
		3	2	1	0	3	2	1	0
内容	主張に理由があったか	24%	56%	21%	0%	26%	66%	9%	0%
	反論（相手チームに対する反応）があったか	23%	43%	23%	10%	14%	59%	17%	10%
	定義ができたか（PMのみ）	43%	57%	0%	0%	40%	20%	40%	0%
	例やデータを用いて、十分に説明をしているか	6%	56%	21%	18%	9%	71%	17%	3%
	POIで積極的に議論しているか	3%	3%	24%	71%	3%	14%	34%	49%
表現	はっきりとわかりやすい言葉で話しているか（声の大きさ、スピード）	18%	50%	29%	3%	31%	49%	20%	0%
	Non-Verbal Expressionで聴衆を意識しているか（アイコンタクト、身振り手振り）	6%	18%	53%	24%	11%	60%	29%	0%
	構成はわかりやすいか（論点の順番、ナンバリング、サインポスト）	12%	38%	44%	6%	43%	49%	9%	0%
	スピーカーの役割を果たしているか	26%	29%	38%	3%	54%	37%	9%	0%

生徒による自己評価においても教員による評価においても、ほぼすべての項目において伸びがみられる。特に表現力については大幅な伸びを示している。「定義ができたか」については唯一伸びが見られないが、どのような定義が適当で効果的な議論につなぐことができるかという点が指導する上でも難しいポイントではあるので、来年度に向けて教員が研修する必要がある。

2）アンケートによる調査結果

生徒の英語運用力とディベートに必要な能力についてのアンケートを初回、中間期（冬休み前）、最終回に実施した。昨年度までは、初回はできるようになりたいこと、中間期、最終回でできる点について２つ選んで答える形式だったが、その形式ではアンケートの目的がわかりづらいため、今年度はアンケート項目の内容を再検討し、それぞれの点についてできるかどうかを３段階で答える形式とし、ディベートの授業を経験することで得られる力の伸びを３回のアンケートを通して見ることをねらいとした。また、生徒たちのディベートの授業に対する気持ちを把握するために、アンケートの下に意見や感想を書く欄を設けた。

アンケート

1．次の項目について、今のあなたの状況をA～Cの３段階で表しましょう。
A・・・できる
B・・・ときどきできる
C・・・できない

		開始時(10月)			中間期(12月)			最終回(2月)		
		A	B	C	A	B	C	A	B	C
1	ペアやグループで英語で話すことができる。	19%	47%	22%	36%	55%	12%	27%	64%	9%
2	クラス全体の前で英語を話すことができる。	17%	42%	36%	39%	52%	12%	33%	52%	18%
3	間違いを恐れず英語でドンドン話すことができる。	17%	50%	31%	27%	55%	21%	24%	64%	15%
4	英語で話を聞きながら要点をメモすることができる。	11%	58%	31%	33%	52%	18%	21%	64%	18%
5	相手の話がわからないとき、すぐに聞き返すことができる。	33%	42%	25%	18%	45%	39%	15%	48%	39%
6	話を聞き、内容を引用して議論を広げることができる。	8%	33%	56%	9%	42%	52%	15%	42%	45%
7	メモがあれば英語で主張を伝えられる。	22%	44%	31%	45%	39%	18%	33%	61%	9%
8	とっさに単語が出ないとき、ほかの表現に置き換えて言うことができる。	11%	56%	33%	12%	61%	30%	9%	70%	24%
9	主張に理由や具体例を添えて話すことができる。	17%	44%	39%	30%	52%	21%	24%	61%	18%
10	グループ内でグループの話し合いに貢献することができる。	17%	56%	25%	36%	55%	12%	33%	64%	6%
11	グループのメンバーと協力してグループとしての意見をまとめることができる。	14%	44%	39%	24%	55%	21%	33%	58%	12%

以下に最終回のアンケートに生徒が書いた意見、感想のいくつかを載せる。

①英語で主張することは簡単ではありませんでした。より効果的な主張を考えることをグループで意識することができました。また、相手側が言ってくるであろう反論を予想することも大切だと知りました。

②ディベートは即興型でも準備型でも難しかったです。ディベート特有の英単語や思考を身につけられました。

③意外に楽しかった。ディベートをやってみて、英語が楽しいと初めて感じました。

④文法が合っているかどうかよりも、伝えることが大切だとわかりました。

⑤はっきりと話して相手に伝えることが重要だと改めて感じました。

⑥話す力を身につけることができました。英語ディベートは嫌いですが、成長は感じられました。

⑦自分の英語力に自信を持つことができました。

⑧だんだんと英語で表現できるようになりました。

⑨自分にまず足りていないのは単語力だと感じました。

⑩最初は不安だったけれど、最後は自信を持ってできました。

⑪Debate class was fun!I was not good at speaking English because I was afraid of making mistakes. Now, I'm not afraid of mistakes."

⑫英語で考えて話すのは、まずやってみることが大切だと思った。ＰＤＡ全国大会ではとても良い刺激を受けた。社会問題について英語で考えるのは難しかったけれど、やりがいがあった。

⑬For me it was very interesting and useful experience. All the topics were closely connected with our daily lives and I could learn to develop my opinion deeper than before. I would be glad to continue to practice debate skills. I'd like to appreciate this occasion."

３）全国大会出場

１２月に行われた第３回ＰＤＡ高校生即興型英語ディベート全国大会に本校２年生の１チーム３名が出場した。チームの結果は参加総数６４チーム中３５位、個人では１名がベストディベータ賞１０位、また学校として授業導入賞を受賞した。

D　その他

１）教員の配置

より丁寧な指導を行うため、本授業に英語ディベートを指導できる英語力のある教員を配置し、生徒４～５名に対して１人の教員が指導に当たった。

２）教員の研修

指導に当たる教員が高度な英語ディベート技術を習得するため、教員１名がＰＤＡ全国高校即興型英語ディベート合宿・大会2017に参加した。そこで行われた教員大会において本校教員が優勝した。

高３　「アクションプラン」の計画と実行

Ａ　ねらい・目的

１）「人との共生」または「自然との共生」に関わる解決すべきグローバルな課題を自ら見出す。

２）課題解決のための「アクションプラン」を作成・実行する。作成にあたってはライフステージを考慮することとし、18歳の自分たちにできることについて取り組むよう促す。

３）企業、政府機関・公的団体、ＮＧＯやＮＰＯ（以下、外部諸団体）との連携のもとにアクションプランを実行する。また、必要となる交渉力やプレゼンテーション能力の向上を目指す。

４）下級生への引き継ぎを考慮し、活動内容を文書化して記録として残す。

Ｂ　実施内容

１）オリエンテーション

前年度の反省を踏まえ、２年次の２月に前倒ししてオリエンテーションを行った。自ら課題を見出すことや、具体的なアクションプラン（課題解決策）を作成して実行に移すということや、それを外部諸団体と連携して進めていくということを具体的にイメージしてもらうことを目的として実施した（資料 高3-A）。

３年次に入るとすぐに作成に取りかかる予定である「アクションプラン計画書（資料 高3-B）」の見本を提示し、春休み中にその構想を練っておくよう指示した。構想を練るにあたっては、見出した課題に対するアクションプランの実行と完了には長い年月を要することも想定されるため、図Ｉに示すように完了までのプロセスをライフステージの中に位置づけることを求めた。また、高３のグローバルイシューズ（ＧＩ）ではその最初のプロセスに取り組むことになることを提示した。

アクションプランの実行計画
18歳　プロセス１（開始）
25歳　プロセス２
35歳　プロセス３
40歳　プロセス４（完了）
※プロセスの刻みや完了を想定する年齢は個々に異なる

図Ｉ

地球規模における重要な課題の解決に取り組みにあたり…
１．根気よく、責任感を持って活動を遂行することができた。
２．自ら計画をたて、実行することができた。
３．関係する人や機関と協力して行うことができた。
４．新たな挑戦をすることができた。
５．人や環境など、自分の働きかけによって物事をより良い方向に変容させた。

図Ⅱ

２）ターゲットの提示、アクションプラン計画書の作成

ターゲットとは、アクションプランの策定と実行における到達目標（図Ⅱ）のことを指している。ターゲットを意識することで、捉えるべき課題はどのようなことか、その課題がグローバル社会に共通する内容であるかを客観的に評価することができる。また、アクションプランの策定段階において現実性、外部諸団体との連携についても意識することにつながった。策定したアクションプランは計画書として学年全体に掲示され、共通性のある課題や個人で取り組むにはハードルが高いプランを中心にグループが形成された。アクションプランは、個人または最大で３人までのグループで実行することとした。３人までとしたのは、他人任せになったり受動的な取り組みとなる生徒、いわゆる「お客さん」を生じさせないためである。

３）アクションプラン実施企画書の作成

アクションプランの実施形態（個人かグループか）を決定後、希望する外部諸団体に連携や協力を依頼するためにより具体的かつ詳細な提案ができるよう、アクションプラン実施企画書（資料 高3-C）の作成に取りかかった。すでに作成済みであるアクションプラン計画書をもとに、先方への正式な提案文書としての性格をもたせ、文言や内容・根拠を明確かつ簡便に記載するよう留意を促した。メンター（指導担当教員）と綿密な打合せを重ねながら作成にあたったが、多くの生徒はこのような文書の作成に不慣れであり、メンターに一言一句頼ろうとする傾向も見られた。そのため、あくまでも文書作成の主体は生徒自身となるよう配慮した指導がなされた。

４）外部諸団体との交渉、アクションプランの実行

高３ＧＩ担当教員による全体ミーティングにおいて、個々のアクションプラン実施企画書について内容を検討・吟味し、承認を出す形をとった。承認が得られた個人またはグループは外部諸団体と早速交渉を始めた。先方と交渉を始めるにあたっては言葉遣いや態度など社会人としてのマナーを事前に指導した。突然に連絡を受ける側の外部諸団体にとり、その趣旨や取り組みの内容を理解していただくことに苦労していた昨年度の高３生の例から、自分たちが策定したプランの内容を簡潔かつ手短に伝え、理解していただけるような工夫を促した。その甲斐もあり、今年度は比較的スムーズに連携相手の理解を得ることができていた。一方で、プラン実行の時期によっては外部諸団体の業務との兼ね合い（繁忙期であるなど）で協力が難しいと断られてしまう例もあり、引き続き連携・協力していただける外部諸団体を探すことの難しさも感じられた。

連携・協力していただける外部諸団体が決定後は、生徒が提示したプランについて実行に向けてより具体的な助言が得られるなど、生徒にとっては気付きや刺激となり、実行に向けてより一層熱心に励む姿が見られた。予定していたプランの実行が完了したときに達成感は、それまでの苦労が吹き飛んでいったと述べる生徒もおり、成長が感じられた。昨年度の高３生が個々の取り組みについてポスターセッションで述べていたことを思い出し、早速、下級生が引き継いで実行内容のbrush upをはかることができるようジャーナル（下記の項目を参照）にその記録を残した。

昨年度の高３生の取り組みの際にはあまり問題にならなかったが、アクションプランの実行にあたり、必要となる資金をどのように調達するかという課題に直面した。自己負担、クラウドファンディング、予算（文科省または管理機関）からの支出等が検討された。その結果、取り組む内容自体や生徒の意向を考慮し、予算からの「給付」または「立替」に決定した。予算からの立替とは下記に示す例のように、生徒自らが行う物品販売の利益から必要な資金を調達することとした。販売する物品の選択、数量や価格設定を自ら考える機会を得ることとなり、また、予算請求書や収支報告書（資料 高3-D･E）の作成・提出を行うなど、社会の経済活動の仕組みの一端を知ることにつながった。また、実際にその販売活動中に趣旨に賛同してくれた購入者から募金を得るなど副次的な効果も得られた。

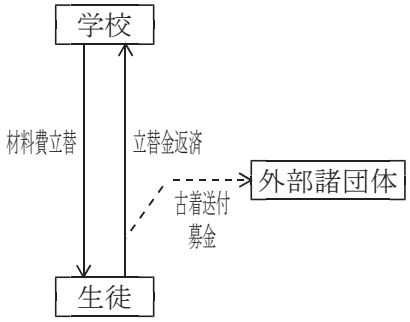
（例）　難民の子ども達に古着を送りたい。その活動を支援している団体に古着を送るための送料を捻出しなければならない。

↓

地域のお祭りで古着の寄贈を呼びかける際にあわせて自分たちでつくったクッキーを販売し、その利益から送料を捻出する。

↓

クッキーの材料費をどのように用意するかが課題となった。



アクションプラン名	取り組みの趣旨・概要
リサイクル石鹸とキャンドルが世界を救う	家庭から出される廃油処理と環境への影響を考慮し、一般家庭でもできる手軽な処理方法を普及させるための取り組みを紹介する。
殺処分ゼロへ	犬の殺処分に着目。その現状を広く知って貰うための啓蒙活動を行う。
小学生と教育を考える	世界の教育の現状を将来の共生の担い手である日本の小学生に知って貰い、自分たちにできることを考えて貰うための取り組み。
子ども食堂を広めるために	孤食となっている子ども達の現状を踏まえ、その支援策の一つとしての「子ども食堂」の現状を分析。
世界の初等教育の質の向上	SDGsの掲げる「質の高い教育をみんなに」という目標達成の支援策の一環として、フィリピンの貧困層の子ども達への文房具支援を行う。
地球温暖化を促進させないためにゴミを削減させる	レジ袋の削減とマイバッグの持参で原料であり資源でもある石油の節約と、焼却によるCO_2の排出量削減による地球温暖化の抑制を目指す。
「いらないもの」を「いるもの」に	物資の有効活用と廃棄物の削減を目指し、学習活動に有効活用できそうな道具を日本からカンボジアへ送る活動。
地球に優しい商品選び	消費地に近い場所で生産されている商品を選び、その輸送に係るCO_2排出量の削減を目指す。
ペットの殺処分を減らすための啓蒙活動及び譲渡活動	殺処分は処分されるペットにとって不幸なことであり、処分する側には心の負担がもたらされる。飼育する以上、その責任の重要さを訴える。
アライグマ大作戦　～身近な動物から考えよう～	アライグマが身近に存在しているという事実から、外来生物が在来生物に与える影響やその駆除の必要性や重要性を訴える。
フィリピンに物資を届けよう！	貧困層の人々の生活を支援するための活動に自分たちも協力するところから「人との共生」を考え、実行していく。
札幌聖心による難民支援プロジェクト	タンザニアの難民支援のために古着を地域のお祭りの際に回収することで、身近な人々から難民支援の輪を広げていきたい。
Soy meat project	日本の過疎地域の名産品消費拡大による地域振興を図り、タイ王国の貧困層の子ども達の栄養不足の改善を図るためにその名産品を活用する。
Trust	歴史認識やメディアは日韓関係にどのような影響を与えているかを調査・研究し、その結果を踏まえよりよい結果を築くための提案を行う。
教育の大切さを絵本で伝えよう	初等教育の大切さを絵本を通じて訴え、満足に初等教育を受けさせることができていない国々に対する支援策を考える。

５）ジャーナルとエビデンスの整理

ジャーナルとは、ＧＩの授業時間および課外において取り組んだ活動を記録として残す文書（資料 高3-F）のことを指す。また、やりとりした内容がわかるメモや画像、メール・ＦＡＸ・電話の送受信記録をエビデンスとして添付することを求めた。いずれもその活動時間ごとに作成してファイリングし、ターゲットの達成状況を確認するための資料としても活用した。

６）ポスターセッション

15の個人またはグループを４つのクールに分け、作成したＡ１版サイズのポスターをもとに、質疑応答の時間を含め15分のプレゼンテーションを行った。下級生に対して自分たちの実行したアクションプランへの理解と意義を深めてもらい、その継承と発展を視野に入れて取り組んでもらえるよう意識した発表原稿の工夫が為されていた。

C　評価・分析

アクションプランの策定と実行に関わるルーブリック評価を生徒およびメンターである教員を対象に実施した（資料 高3-G, H, I）。生徒自身はアクションプランをやり遂げたことによる自己肯定感の高まりのせいか総じて自己評価は高く付けられている。また、教員は客観性を保ちつつ発達段階を考慮して厳しめの評価をしている。また、生徒と教員との間で評価が大きく乖離していたのは「課題の捉え方」「アクションプランの立案」「アクションプランの実行」の３項目であった。乖離していたかどうかの判断は「課題の捉え方」については生徒と教員との間で評価　が２段階違う場合とした。また、それ以外の評価項目については一方が評価「４」または「３」をつけ、もう一方が「２」または「１」を付けている場合とした。乖離が大きかった項目についての分析は次のとおりである。

①「課題の捉え方」の評価の段階設定にあたっては意外性や普遍性を重視した。意外性とは同じ課題であってもその解決に他の人とは目のつけ所が異なることを意味している。また普遍性とはその課題が限られた特定の地域のものではないことであったり、もしくは誰でも取り組める解決策であることを意味する。そのどちらも満たした場合に付く「４」という最高評価をつけた生徒は想定よりも遥かに多かった。その一方で同じく「４」をつけた教員は少なく、生徒と教員との間で大きく乖離していた。最高評価をつけた生徒が多かったのは自身への過大評価や、評価の観点をきちんと理解出来ていなかったのではないかと考えられる。生徒および教員ともに「４」の評価が付けられていたものには、貧困層の子どもの栄養状態の改善にビタミンなどの微量栄養素に着目する一方で、その改善に日本の過疎地域の特産品を活用して地域振興をも視野に入れるなど

斬新なアイディアを示したものであった。

②「課題の捉え方」と「アクションプランの立案」または「アクションプランの実行」のいずれか一方もしくは両方の間で評価の乖離が連動すると推察していたが、必ずしもそのとおりとはなっていなかった。しかし、「アクションプランの立案」と「アクションプランの実行」いずれの評価も「課題の捉え方」同様、乖離がみられた。「アクションプランの立案」については生徒および教員とも実現性という点では評価しているが、独創性という点では教員側の評価が低いという傾向がみられるのではないかと推察される。「アクションプランの実行」については１８歳という発達段階に相応しい能力を発揮できる実行策となっているかで評価がわかれていると推察される。生徒はこれくらいが自分の行えるレベルであると過小評価し、教員はこの生徒であればもっとレベルを高く設定できるはずであるとして生徒の能力を高く評価しているため乖離が生じたと推察される。

なお、これとは別に筑波大学附属高等学校が作成されたアンケートも実施した。その結果や分析については別項目を参照されたい。

D　検証

本年度第２回目の運営指導委員会で高３のルーブリック評価について報告した際、次のようなご指摘をいただいた。最終年度の取り組みに向けて、指導内容の改善と工夫を図ってまいりたい。

（指摘事項）

１．ルーブリックの結果について、生徒と教員との間で乖離の大きい項目についてはフォローアップを行っているか。教員が「１」と評価しているのに対して、生徒は「４」をつけている項目が見受けられる。生徒と教員の間で話し合いをしたり、原因を突き止める必要があるのではないか。

２．アクションプランの設定段階において、教員はそれを非現実的と捉え評価が低くなっている場合もあるとのことだが、教員の捉え方が必ずしも正しいわけではない。生徒の考え方、捉え方にも正しさはあるのではないか。

３．評価基準や尺度を見直してみてはどうか。世間の常識に照らし合わせて妥当な判断に行き着くことを良しとするのか、理想に向けて考えていくプロセスを評価するのか。教師の助言に従わないから評価が低くなるのはおかしい。
（→教師の助言に従わないから低評価ということについては否定させていただいた。）

４．妥当か、実現可能かという尺度だけではなく、そのようにプランを立てるに至るところまでの考え方について、もっと評価してあげてはどうか。

国際的資質や態度に関する自己評価・アンケート

ＳＧＨに関わる活動の効果を測定するため、筑波大学の附属学校教育局および附属高等学校よりアンケートが提示された。それをもとに、評価の段階設定および質問項目の一部修正と追加を行って本校用のアンケートを作成（資料 高3-J）し、実施した。

【実 施 日】　２０１８年1月２９日（月）～３０日（火）

【対　　象】　高校３年生３１名（回収率９６．８％）
※３１名中３０名分を回収することができたが、１名は家庭学習期間に入っており実施できなかった。

【分析結果】

（１）ほとんどの生徒は、ＳＧＨの取り組みが学校全体でなされたからこそ共生を図るうえで課題となっていることに目を向けるきっかけをつかんだことや、課題解決に向けて自らが動き出せたことを肯定的に捉えている。アクションプランの実行を成し遂げたことによって自信がつき、自己肯定感が増し、グローバル社会で自らが活躍することを意識するようになった生徒が多い。

（２）意見を異にする者との間で合意形成を図る過程で苦労はしたが、その重要さや合意形成を図ることができたという成功体験が、次の課題解決へのステップを踏み出すきっかけとモチベーションにつながっている。
→ディスカッションやアクションプランの実行に向けた外部諸団体との交渉を通じて

（３）国際貢献活動には興味・関心をもっている。しかし、それをビジネスとして取り組むことを望む者の割合は多くない。ボランティアなどの形で携わっていくことを望む傾向が強く感じられる。

（４）物事を批判的な目で見つめ、考え、分析する力が育っている。また同時に、論理的な思考や根拠の提示ができるようになっている。

（５）外国語の活用能力向上がグローバル社会での活躍に不可欠であることは認識している。その一方で、自分がその能力に磨きをかけるべく努力はしているが満足する成果となっていないことへの焦りや諦めも感じられる。

（６）外国語の活用はグローバル社会を生き抜くうえでのツールの一つに過ぎず、グローバル化が進んでいく中でビジネスや国際貢献活動で活躍し、責任を果たすには医療衛生・教育・土木など何らかの専門性を培うことが必要であると認識している。

（７）日本の文化や歴史について、それを素晴らしいと肯定的に捉えている。その一方で、その文化や歴史を伝えるということを上手くできない様子がうかがえる。素晴らしいということを感覚では捉えているが､その本質や意味などについての理解が十分ではないことによるものと推察される。グローバル化が進む中で、互いの文化や歴史、習慣を知っておくことが相互理解に繋がることは理解している。

（８）外国の文化や歴史、日本との関わりについて学ぶことや知ることには興味・関心を示している。短期の海外体験学習でそれらを体験することには積極的な生徒が多いが、長期に渡ったり日常的に異文化の中に身を置くことへの抵抗感を感じている者が多い。年間を通して世界中の姉妹校お

よびそれ以外の学校から長期または短期で数多くの留学生を受け入れているため、本校の生徒は異文化に触れる機会が数多くある。留学生をあたたかく面倒を見て触れあっている姿を目にしているだけ意外な結果である。

（９）ＩＣＴの活用については１年次から自発的に利用して調べや発表を行っていたことも影響し、その活用能力の向上を多くの生徒が実感している。情報収集においても積極的にＩＣＴを活用しているが、一方で新聞や図書資料の活用となると途端に低くなる。インターネット上の情報を鵜呑みにし、左右される傾向が強い。情報の取捨選択と真偽を見極める意識と能力の向上に勤める必要がある。

(10) ＳＧＨそのものの取り組みを否定するものではないが、その取り組みに割かなればならない時間が膨大で他教科・科目の学習や特別活動とのバランスを考慮した活動内容となることを求める声が多く聞かれた。

(11) ＳＧＨの取り組みが、進路選択や将来の職業選択によい影響を及ぼしている。

【運営指導委員会での指摘事項】

本年度第２回目の委員会において、アンケートの結果について報告した。それに対し、実施方法やその他、下記に示すご指摘やご助言をいただいた。必要な事項については、最終年度に向けて改善を図っていきたい。

（１）同じ質問項目に対して１年次と３年次それぞれの修了時点での評価を付けてもらう方式にした方がよい（下記参照）。グローバルイシューズ（ＧＩ）の取り組みが積み重なることにより、意識や態度、能力の変容の様子について知ることができるのではないか。１年次修了時点のことを思い返してもらうのは大変かもしれないが、そうできるとよい。

	質問項目	１年修了時				３年修了時			
1		4	3	2	1	4	3	2	1
2									
3									
4									

４：よくあてはまる
３：どちらかというとあてはまる
２：あまりあてはまらない
１：あてはまらない

（２）質問項目が多すぎる。一部には質問内容が被っていると思われるものも見受けられる。質問項目については本校独自にもう少し整理した方がよい。

（３）質問項目の文言について、全て肯定的な捉え方を表す文言に変えてみてはどうか。そうすると、評価２や１がついた割合の高いものを中心に指導内容や方法について、どのように改善に努めたらよいかが浮かびやすくなる。

（４）国外で仕事をするうえで「仕事ができる」と思われる要素は一つ目に専門性を持っていること、二つ目に自分の考えを持っていること、三つ目に相手を理解しようとすることである。一つ目の項目については、そのように思っている生徒が多いこと、二つ目や三つ目の項目についてはすでにＧＩに取り組んでくたことにより高い意識を持つようになっていることが該当する質問に対して肯定的に回答している率の高さからうかがえる。もともと聖心女子学院の教育にはそのような素地があるが、ＧＩに一生懸命取り組んできたことでより一層、そのような意識が芽生えたのだと思われる。

（５）仮説を立てることができるというのは現状を知り、分析ができているからこそでありすばらしいことである。

（６）質問項目の31、34、41はＳＧＨの内容としても重要な項目である。しかし、31と41の結果に矛盾が見られる。数名の生徒を抽出し、これらの質問内容についてディスカッションさせて理由や矛盾をうんだ原因を突き止めてみるのも面白い。

（７）質問項目の83が意図することは何なのか。英語ができることが他人より優れていると考えたり、英語ができると格好いいと考えるのは何か違うと思う。質問項目が適正かどうかを判断するか、誤解を招かないよう文言を再検討してはどうか。

（８）アンケートの項目のいくつかについては削除してはどうかという意見も出ているが、大人の目から見て変だからといって削除するのはやめた方がいいかもしれない。このアンケートをどのように活用するかによる。生徒の実態を把握するために必要であるならば削除する必要はない。そのあたりのことを再検討して欲しい。

（９）概ね、３年間のＳＧＨの取り組みを肯定的に評価している生徒が多いことは素晴らしいことである。

(10) 自由記述で気になるのは、スケジュールがきついと答えている生徒が多いことである。これは指定期間の最終年度に向けて改善と工夫を図っていきたい。

2017年度　高1GIルーブリック

（タイ・東京・ニセコ・美瑛・NY）研修参加　←〇を付ける

高校1年　G・SS　クラス　　番　　名前

Aテーマ設定とリサーチ

	情報探索	情報の取捨選択	情報の読解	調査メモの扱い	多言語活用※
4	必要だと思える情報に不足なくたどり着くことができた。	情報が新しく正確かを判別した。	情報の文脈、語句、表現に注意して読み、その内容を自分で説明できるほど理解した。	正しくルールを守りながら調査メモに記入し、かつ必要枚数より多く集めた。	多言語の情報源を全体の調査内容の半分程度活用できた。
3	必要だと思える情報におおむねたどり着くことができた。	情報が新しく正確かおおむね判別した。	情報の文脈、語句、表現に注意して読み、その内容を自分でおおむね説明できるほど理解した。	正しくルールを守りながら調査メモに記入し、かつ必要枚数分集めた。	多言語の情報源を全体の調査内容の三分の一程度活用できた。
2	必要だと思える情報にあまりたどり着けなかった。	情報の新しさ、あるいは正確さ、どちらかの判別に不足があった。	情報の文脈、語句、表現に注意して読んだが、その内容を自分で説明するとき、説明できない語句がいくつかあった。	調査メモに記入したが、ルールを守らなかった。あるいは必要枚数分に届かなかった。	多言語の情報源の読解は困難だったが、読める範囲で資料を集めた。
1	必要だと思える情報にたどり着けなかった。	情報が新しく正確か、検討すらしなかった。	情報の文脈、語句、表現に注意して読まず、読んだまま使用したため、その内容を自分で説明できなかった。	集めた情報を調査メモに記入しなかった。	多言語の資料を読解できなかった。

B発表

	調査メモの利用	レジュメの内容	レジュメの構成	口頭発表のまとめ	聞き取る姿勢
4	調査メモを順序だてて整理し、伝えたい部分を的確に選択して、発表やレジュメ作成に活用した。	簡潔で効果的な論理の展開と資料の活用を考え、説得力をもたせた。	レイアウトの工夫や画像挿入など文字情報だけに頼らない工夫を複数箇所行った。		発表を的確に聞き取り、わからない点は質問し、その内容から自分の意見を持つことができた。
3	調査メモの整理を行わなかったが、伝えたい部分を抜き取って発表やレジュメ作成に活用した。	やや無駄があるものの効果的な論理の展開と資料の活用を考えようと努力した。	レイアウトの工夫や画像挿入など文字情報だけに頼らない工夫を一カ所ではあるが行った。	レジュメの内容だけではなく適宜情報の追加と削除を行った。	発表を的確に聞き取ることについて不足はあったが、自分の意見を持つことができた。
2	調査メモの整理を行わず、余分な部分も含めてレジュメの作成や発表を行ってしまった。	非常に無駄あるいは不足があったが、効果的な論理の展開について考えようと努力した。	レイアウトの工夫や画像挿入など文字情報だけに頼らない工夫をしたが、必要性は検討しなかった。	レジュメの内容そのままの発表を行った。	発表を的確に聞き取ることについて不足があり、自分の意見を持つこともなかったが、耳を傾ける努力はした。
1	調査メモの整理を行わず、レジュメ作成や発表を行うときに情報カードを活用しなかった。	非常に無駄あるいは不足があり、論理の展開も資料の活用も効果性に欠けていた。	レイアウトの工夫や画像挿入など文字情報だけに頼らない工夫をせず、検討もしなかった。	レジュメの内容に沿ってすらいない発表を行った。	発表を聞き流し、自分の意見を持つこともなかった。

Cフィールドワーク

	聴取	聞き取る姿勢
4	事前に疑問点を整理し、話の内容から自分との考えの共通点、相違点、新たな知見を整理した。	礼儀正しく訪問し、相手の話を真剣に聞き、積極的に情報を収集しようと努めた。
3	事前に疑問点を整理し、話の内容から自分との考えの共通点、相違点、新たな知見を整理しなかったが、得た情報をまとめた。	礼儀正しく訪問し、相手の話を聞いた。
2	事前に疑問点を整理せず、話の内容から得た情報をまとめたが、とりこぼしがあった。	礼儀についてときおり誠意を欠き、相手の話を聞く態度にもやや問題があった。
1	事前に疑問点を整理せず、話を聞き流し、得た情報をまとめずに終わった。	礼儀について誠意を欠き、相手の話も真剣に聞かなかった。

D探究報告書

報告書の内容①	報告書の内容②
事前調査、レジュメ作製、フィールドワークを通して得た知識から進んで次の課題を見いだし、複数の新たな問題を提起した。	
事前調査、レジュメ作製、フィールドワークを通して得た知識から次の課題を見いだし、一つ新たな問題を提起した。	自分が立てた課題に対し、現実的かつ等身大の解決策を提示できた。
事前調査、レジュメ作製、フィールドワークを通して得た知識から次の課題を見いだすにとどまった。	自分が立てた課題に対し、解決策を提示できた。
事前調査、レジュメ作製、フィールドワークを通して得た知識を深めることが出来なかった。	自分が立てた課題に対し、解決策を提示できなかった。

【K2 前期GIルーブリック(2017)】

G ＊ SS　番 氏名

1 リサーチに関して(調査メモの作成)

	観点	5	4	3	2	1
1	情報検索	図書館の複数の書籍や複数の信用性のあるウェブサイトを検索し、更には公的機関等に問い合わせて情報を得た。	図書館の複数の書籍や複数のウェブサイトを検索し、必要と思われる情報をそれぞれから得ることができた。	図書館の書籍やウェブサイトを検索し、それぞれから情報を得た。	ウェブサイトを検索して情報を得た。	何もしなかった
2	情報の取捨選択	集めた情報から必要なものを選び、更に信憑性について精査した結果、様々な角度からの十分な量の情報が得られた。	集めた情報から必要なものを選び出し、十分な量の情報が得られた。	集めた情報から必要なものを選び出した。	集めた情報では不十分だった。	何もしなかった
3	調査メモ	項目に分けてまとめ、必要事項に不足のない調査メモを10枚以上作成し、分かった事と不明な事が整理できるように工夫した。	項目に分けてまとめ、必要事項に不足のない調査メモを5枚以上作成した。	必要事項に不足のない調査メモを3枚以上作成した。	必要事項に不足のない調査メモを1枚以上作成した。	調査メモを作ることができなかった

2 レジュメの作成に関して

	観点	6	5	4	3	2	1
1	レジュメ作成	要点が的確に分かりやすくまとめられた。図表を見やすく、効果的に使うことができた。色使いなども工夫できた。	要点がまとめられた。図表を見やすく使うことができた。	要点をある程度まとめられた。図表を使うことができた。	要点をまとめようと努力したがまとめられなかった。図表を使う努力が足りなかった。	要点をまとめなかった。図表を使わなかった。誤字脱字が複数あった。	期間内に完成できなかった

3 フィールドワークに関して

	観点	4	3	2	1
1	聴く姿勢	講義や説明をメモをとりながら聴き、同時に質問や疑問を考えることができた。	講義や説明をメモをとりながら、聴くことができた。	講義や説明をただ聴いた。	話を聴くことができなかった。
2	質問	準備した質問以外に、相手の話の中から、疑問点を見つけて、発展的な質問をすることができた。	準備した質問以外に相手の話の中から、YES、NOで答えられる質問を1つ以上することができた。	あらかじめ準備した質問をすることができた。	質問できなかった

4 GI報告書の作成とグループ発表に関して

	観点	6	5	4	3	2	1
1	GI報告書の体裁	項目毎に、見出しで分かりやすく整理する以外にも、色使いなどの配慮・工夫ができた。図表を過不足なく効果的に活用できた。	項目毎に、見出しで分かりやすく整理することができた。図表を効果的に活用できた。	項目毎に、見出しを作ってまとめることができた。図表を使った。	本文を項目に分けることができた。	本文を項目に分けることができなかった。	期間内に完成できなかった
2	GI報告書の内容	リサーチ内容と自分の意見を交えてまとめられた。課題発見、解決策について客観的な分析の上で自然との共生の観点で現実的に書けた。	リサーチ内容をまとめられた。課題発見、解決策について自然との共生の観点で現実的に書けた。	リサーチ内容を土台として書くことができた。課題発見と解決策を自然との共生の観点で書けた。	リサーチで得た情報をそのまま写した。課題発見と解決策を書くことができた。	リサーチで得た情報をほとんど使わず、課題発見と解決策も自分の考えだけを書いた。	期間内に完成できなかった。
3	ｸﾞﾙｰﾌﾟ発表の自分の担当	発表原稿を見ないで、伝えたいこと、自分の意見について効果的に伝えることができた。	発表原稿を見ながら、伝えたいこと、自分の意見について伝えることができた。	発表原稿などを準備し、伝えたいことについて時間内に過不足なく話すことができた。	発表原稿などの用意はあるが、内容についての理解が不十分で思うように伝えられなかった。	発表原稿などを用意せず、伝えたいことの整理といった事前準備が不十分だった。	発表できなかった

5 全体を通して

	全体として	A リサーチ・FWを通して、「自然との共生」に関する課題解決策を考え、仲間と共有することができた。	B＋ リサーチ・FWを通して、「自然との共生」に関する課題解決策を1つ考えることができた。	B リサーチ。FWを通して、調べた内容にとどまらず、新たな課題や興味をもって調べたいテーマを見つけた。	C リサーチ・FWを通し、調べた内容を確認し、さらに新たな課題や視点を得ることができた。	D リサーチ・FWを通して、自分のテーマについて内容を確認することができた。	E 体験から何も学べなかった。

高校３年　グローバルイシューズにむけて

高１で「人との共生」、高２で「自然との共生」をテーマに、フィールドワークと連携した探究学習（レジュメ作成、発表）とディスカッション（意見の主張と合意形成）を行ってきました。３年目は、いよいよ私たちの行動をどう変えていくか、アクションプランの実行と検証です。次の項目について、よく考えて記入してください。次年度のＧＩは、この記入した内容をベースに展開していく予定です。

Ⅰ．高校３年生でのテーマはどちらのジャンルにしますか？（どちらかに○印）

人との共生（　　）　　自然との共生（　　）

Ⅱ．Ⅰで選択したテーマでの共生を実現するためにしなくてはならないこと、行動に移さなくてはならないと考えていることを具体的に述べてください。

Ⅲ．Ⅱで述べたことを高３で実現するために、実施すべきアクションプランを具体的に述べてください。また、そのプランの実現のために、協力をしてほしい団体や組織などを書いてください。（これから、折衝し連携して活動していくことをイメージしてください。）

●具体的なアクションプラン

●上記のプランを行うと、どのような効果が期待できるか？

●上記のプランを実現するために、どのような団体と連携を考えているか？

高３ＧＩ　アクションプラン計画書

【メンバー名】

【アクションプラン名】

【どのようなことをグローバルな課題として取り上げるか】

【課題として取り上げる理由】

【課題解決に向けた具体的なアクションプラン】

	具体的なアクションプラン（ターゲット４）	アクションプランの実行により想定される変容（ターゲット５）
18歳		
30代		
50代		

【18歳時点のアクションプランの連携機関と内容（ターゲット３）】

連携機関名	連携して取り組むこととして想定していること（相手に提案する内容）

地球規模における重要な課題の解決に取り組むにあたってのターゲット（目標）
１．根気よく、責任感を持って活動を遂行することができた。
２．自ら計画をたて、実行することができた。
３．関係する人や機関と協力して行うことができた。
４．新たな挑戦をすることができた。
５．人や環境など、自分の働きかけによって物事をより良い方向に変容させた。

２０１７年　月　日

アクションプラン実施企画書

【氏名】
（１）代 表 者　○○　○○
（２）メンバー　○○　○○、○○　○○　　（以上、全員高校３年）

【代表者連絡先】
（１）所属　札幌聖心女子学院高等学校
（２）住所　札幌市中央区宮の森２条１６丁目１０－１札幌聖心女子学院
（３）電話番号　０１１－６１１－９２３１（学校の代表番号）
（４）アドレス
←書き始めを揃える

【指導担当教員】
○○○○

【連携を求める相手先】
（１）名称
（２）代表者　○○　○○　様（最初に連絡を取った後に記入する）
（３）住所
（４）電話番号
（５）
←書き始めを揃える

【プラン名と具体的な内容】
（１）プラン名
●●バングラデシュで小学校建設

（２）内容
●●貧困にあえぐバングラデシュの子ども達に無償で教科書を給付し、給食もまかなって
●教育にかかる費用を全て無償化する。そのために必要な費用を政府と交渉し、住民税に
●に１％上乗せして徴収する。

箇条書きならば…

●Ａ）バングラデシュの子ども達に無償で教科書を給付する。
●Ｂ）給食も無料で賄う。
●Ｃ）上記Ａ、Ｂ以外の教育にかかる費用も無償化する。
●Ｄ）必要な費用は住民税に１％上乗せして徴収できるよう政府と交渉する。

●の数だけマス目を空ける（以下の項目の記入の際も同様に）

（３）目的や経緯

（４）実施に向けた方法と計画

【その他の連携先】
特になし

SGH主任	メンター

2017年6月　　日

高3GI　アクションプラン予算請求書

代表者	高3－
メンター	

請求理由

立替希望額　　円

給付希望額　　円

※立替または給付のいずれかを選択

払出希望日　　月　　日

※希望日より前後することを想定しておいて下さい

収入				支出				残高	備考
品目	単価	個数	計(A)	品目	単価	個数	計(B)		
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	

残金　　円　（立替金返済後の残金は、梅干し弁当募金への寄付とする）

※ 文房具（紙・テープなど）は、学校備品でまかなえないものを請求の対象とします。
※ 領収書を必ず貰うこと。
※ 領収書の宛名は「札幌聖心女子学院」とし、但書きには具体的な品目を記入してもらうか、購入品目がわかるレシート等を合わせ、「収支報告書」に添付すること。

指示事項

SGH主任	メンター

2017年6月　　日

高3GI　アクションプラン収支報告書

代表者	高3－
メンター	

請求理由

立替希望額		円
給付希望額		円

※立替または給付のいずれかを選択

収入				支出				残高	備考
品目	単価	個数	計(A)	品目	単価	個数	計(B)		
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	
								0	

残金　　円　（立替金返済後の残金は、梅干し弁当募金への寄付とする）

※ 領収書を裏面に貼り付けること。

高校３年　グローバルイシューズ　ジャーナル（授業時用）

月　　日（　　）　　：　　～　　：　　氏名

本時の実施目標
（何を行うのか具体的に記載）

本時のターゲット（意識したいものに〇）

1　根気よく責任感を持って活動を遂行できた。

2　自ら計画を行い、実行することができた。

3　他人と協力して行うことができた。

4　新たな挑戦をすることができた。

5　人や環境など、自分の働きかけによって物事をより良い方向に変容させた。

本時に行ったこと（行動、得た知識、アドバイスなど記載）

次時につながる課題

【エビデンス（証拠・資料　添付面】

高校３年　グローバルイシューズ　ジャーナル（課外用）

月　　日（　　）　　：　　～　　：　　氏名

本時の実施目標
（何を行うのか具体的に記載）

本時のターゲット（意識したいものに〇）

1　根気よく責任感を持って活動を遂行できた。

2　自ら計画を行い、実行することができた。

3　他人と協力して行うことができた。

4　新たな挑戦をすることができた。

5　人や環境など、自分の働きかけによって物事をより良い方向に変容させた。

本時に行ったこと（行動、得た知識、アドバイスなど記載）

次時につながる課題

【エビデンス（証拠・資料　添付面】

高３　アクションプランの策定と実行　評価シート（教員用）

対象生徒	
評価者	

評価項目	4	3	2	1
課題の捉え方	意外性があり、目の付け所がよいと思わず唸るような課題を見出していた	ありきたりではあるが重要度が高く、喫緊に、かつ国・地域を問わず普遍的に存在する課題を見出していた	ありきたりではあるが重要度が高く、国・地域を問わず普遍的に存在する課題を見出していた	すでに取り組まれている事例が多く見受けられるものであった
アクションプランの立案	実現性が考慮されており、かつ独創性や他にはない視点がみられた	実現性には一部疑問なところはあるが、独創性や他にはない視点がみられた	実現性は考慮されてはいるが、独創性や他にはない視点はみられなかった	実現性も考慮されておらず、独創性や他にはない視点もみられなかった
アクションプランの実行	ライフステージを反映した18歳の自分に実現可能な、かつ独創性や他にはない視点が反映されたプランが実行された	ライフステージを反映した18歳の自分に実現可能な、かつ一部に独創性や他にはない視点が反映されたプランが実行された	ライフステージを反映した18歳の自分に実現可能なものとするには少々物足りないレベルや内容のプランの実行にとどまった	ライフステージはあまり考慮されず、その内容やレベルも18歳の生徒が実行するものとしては物足りないものであった
アクションプランの普及	どの地域においても実行可能なプランとなっていた	一部を除き、どの地域においても実行可能なプランとなっていた	一部の地域においてのみ実行可能なプランとなっていた	日本以外の地域では実行するのは難しい
自立に向けた支援かどうか	支援の継続性が考慮されているとともに、自立または自己解決を目指した方策も考慮されたプランとなっている	支援の継続性は考慮されているが、自立または自己解決を目指した方策という点では改善の余地がある	支援の継続性は考慮されているが、自立または自己解決を目指した方策という視点は欠けている	一過性の支援にとどまったプランとなっていた
連携相手（外部諸団体）の選択	プランの内容に沿った協力と助言を充分に得られる連携相手を選べていた	プランの内容に沿って協力と助言を得られる連携相手を選んでいたが、内容の変更に伴い連携相手も変更することがあった	プランの内容や趣旨に沿った連携相手を選んだとはいえなかった	連携相手とはいえず、単なる窓口にしか過ぎないような団体を選んでいた
連携相手（外部諸団体）のやりとり	アポイントをきちんととり、礼節をわきまえたやり取りができていた。プランに反映するような有益な助言を受けることができていた	アポイントはきちんととっていたが、礼節の点で一部注意を受けるようなことがあった。プランに反映するような有益な助言が受けることができていた	協力と助言を受けるような積極的にやりとりはあまりなかった。	助言や協力を受けるようなやり取りは最初と最後、もしくはそのどちらか１回限りしかなかった
計画性	予定した期日までに実行できた	予定した期日より少し後に実行できた	予定した期日より実行するのが大幅にずれ込んだ	予定した期日まで、及びその後も実行できなかった
ジャーナルの整理	必要な資料やメモもきちんと保管・整理され、ファイリングできていた	必要な資料やメモもおおむね保管・整理され、ファイリングできていた	必要な資料やメモもおおむね保管されていたが、整理・ファイリングは不十分だった	資料もメモも全く保管・整理されていなかった
アクションプラン報告書	必要かつ十分な情報がわかりやすく整理され、根拠も明示されており、下級生への引き継ぎ資料としても活用できる	情報の整理や根拠の提示について不十分な点もみられるが、概ね下級生への引き継ぎ資料として活用できる	情報の整理や根拠の提示について不十分な点も多く、下級生への引き継ぎ資料として活用するのは難しい	情報の整理や根拠の提示がされておらず、事項の羅列にとどまり、下級生への引き継ぎ資料としても不足している

氏名

高３　アクションプランの策定と実行　評価シート（生徒用）

評価項目	4	3	2	1
課題の捉え方	意外性があり、目の付け所がよいと思わず唸るような課題を見出していた	ありきたりではあるが重要度が高く、喫緊に、かつ国・地域を問わず普遍的に存在する課題を見出していた	ありきたりではあるが重要度が高く、国・地域を問わず普遍的に存在する課題を見出していた	すでに取り組まれている事例が多く見受けられるものであった
アクションプランの立案	実現性が考慮されており、かつ独創性や他にはない視点がみられた	実現性には一部疑問なところはあるが、独創性や他にはない視点がみられた	実現性は考慮されてはいるが、独創性や他にはない視点はみられなかった	実現性も考慮されておらず、独創性や他にはない視点もみられなかった
アクションプランの実行	ライフステージを反映した18歳の自分に実現可能な、かつ独創性や他にはない視点が反映されたプランが実行された	ライフステージを反映した18歳の自分に実現可能な、かつ一部に独創性や他にはない視点が反映されたプランが実行された	ライフステージを反映した18歳の自分に実現可能なものとするには少々物足りないレベルや内容のプランの実行にとどまった	ライフステージはあまり考慮されず、その内容やレベルも18歳の生徒が実行するものとしては物足りないものであった
アクションプランの普及	どの地域においても実行可能なプランとなっていた	一部を除き、どの地域においても実行可能なプランとなっていた	一部の地域においてのみ実行可能なプランとなっていた	日本以外の地域では実行するのは難しい
自立に向けた支援かどうか	支援の継続性が考慮されているとともに、自立または自己解決を目指した方策も考慮されたプランとなっている	支援の継続性は考慮されているが、自立または自己解決を目指した方策という点では改善の余地がある	支援の継続性は考慮されているが、自立または自己解決を目指した方策という視点は欠けている	一過性の支援にとどまったプランとなっていた
連携相手（外部諸団体）の選択	プランの内容に沿った協力と助言を充分に得られる連携相手を選べていた	プランの内容に沿って協力と助言を得られる連携相手を選んでいたが、内容の変更に伴い連携相手も変更することがあった	プランの内容や趣旨に沿った連携相手を選んだとはいえなかった	連携相手とはいえず、単なる窓口にしか過ぎないような団体を選んでいた
連携相手（外部諸団体）のやりとり	アポイントをきちんととり、礼節をわきまえたやり取りができていた。プランに反映するような有益な助言を受けることができていた	アポイントはきちんととっていたが、礼節の点で一部注意を受けるようなことがあった。プランに反映するような有益な助言が受けることができていた	協力と助言を受けるような積極的にやりとりはあまりなかった。	助言や協力を受けるようなやり取りは最初と最後、もしくはそのどちらか１回限りしかなかった
計画性	予定した期日までに実行できた	予定した期日より少し後に実行できた	予定した期日より実行するのが大幅にずれ込んだ	予定した期日まで、及びその後も実行できなかった
ジャーナルの整理	必要な資料やメモもきちんと保管・整理され、ファイリングできていた	必要な資料やメモもおおむね保管・整理され、ファイリングできていた	必要な資料やメモもおおむね保管されていたが、整理・ファイリングは不十分だった	資料もメモも全く保管・整理されていなかった
アクションプラン報告書	必要かつ十分な情報がわかりやすく整理され、根拠も明示されており、下級生への引き継ぎ資料としても活用できる	情報の整理や根拠の提示について不十分な点もみられるが、概ね下級生への引き継ぎ資料として活用できる	情報の整理や根拠の提示について不十分な点も多く、下級生への引き継ぎ資料として活用するのは難しい	情報の整理や根拠の提示がされておらず、事項の羅列にとどまり、下級生への引き継ぎ資料としても不足している

高３　アクションプランの実行　ルーブリック評価の集計結果

	課題の捉え方		アクションプランの立案		アクションプランの実行		アクションプランの普及		自立に向けた支援かどうか		連携相手（外部諸団体）の選択		連携相手（外部諸団体）のやりとり		計画性		ジャーナルの整理		アクションプラン報告書	
	生徒	教員	生徒	教員	生徒	教員	生徒	教員	生徒	教員	生徒	教員	生徒	教員	生徒	教員	生徒	教員	生徒	教員
生徒Ａ１	4	2	4	2	4	3	4	3	4	3	3	4	4	4	4	3	4	3	4	3
生徒Ａ２	4	2	4	2	4	3	4	3	4	3	4	4	4	4	4	3	4	3	4	3
生徒Ａ３	3	2	3	2	3	3	4	3	4	3	4	4	3	4	3	3	3	3	3	3
生徒Ｂ１	3	4	2	3	3	4	4	4	4	4	4	3	4	4	2	4	2	4	4	3
生徒Ｂ２	4	3	3	3	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	3	3	3	4	3
生徒Ｂ３	4	3	4	3	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	3	4	3
生徒Ｃ１	3	2	3	3	4	2	4	4	3	3	4	3	3	3	4	3	3	3	4	3
生徒Ｃ２	4	2	4	3	4	2	4	4	4	3	4	3	4	3	4	3	4	3	4	3
生徒Ｄ１	4	3	4	3	4	3	4	4	4	2	4	2	4	3	4	1	4	3	4	3
生徒Ｄ２		3		3		3		4		2		2		3		1		3		3
生徒Ｅ１	3	2	4	3	3	3	4	4	4	3	2	2	1	2	2	2	4	2	4	3
生徒Ｅ２	4	2	4	3	4	3	4	4	4	3	3	2	4	2	4	2	4	2	4	3
生徒Ｆ１	4	2	4	2	4	3	4	1	4	1	4	4	4	3	4	4	4	4	4	3
生徒Ｆ２	3	2	3	2	4	3	2	1	3	1	4	4	4	3	4	4	2	4	3	3
生徒Ｇ１	3	2	4	2	4	2	3	4	3	2	4	3	3	3	4	3	4	3	4	3
生徒Ｇ２	3	2	3	2	3	2	3	4	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
生徒Ｇ３	4	2	4	2	4	2	4	4	4	2	4	3	4	3	4	3	4	3	4	3
生徒Ｈ１	3	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4	4	2	2	3	3	4	3
生徒Ｈ２	4	2	3	3	4	2	4	3	4	3	3	3	3	4	3	2	3	3	4	3
生徒Ｑ	3	2	3	2	4	3	4	2	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
生徒Ｊ１	3	3	4	4	4	3	3	3	4	4	4	4	3	3	3	4	3	3	3	3
生徒Ｊ２	3	3	4	4	3	3	3	3	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4
生徒Ｋ１	2	2	2	3	3	2	4	4	2	1	3	3	4	3	3	3	4	3	3	3
生徒Ｋ２	3	2	2	3	3	2	3	4	2	1	4	3	4	3	2	3	3	3	3	3
生徒Ｌ	4	3	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4
生徒Ｍ	3	1	3	2	3	2	3	3	3	1	4	4	3	2	2	2	2	4	3	3
生徒Ｎ１	2	2	3	2	3	3	2	3	2	4	1	4	1	4	4	4	3	3	4	3
生徒Ｎ２	3	2	4	2	4	3	4	3	3	4	4	4	4	4	4	4	3	3	4	3
生徒Ｐ１	4	2	4	2	4	2	4	4	4	1	4	3	4	3	4	3	4	3	4	2
生徒Ｐ２		2		2		2		4		1		3		3		3		3		2
平均値	3.36	2.27	3.43	2.63	3.64	2.73	3.57	3.4	3.54	2.63	3.61	3.27	3.54	3.3	3.46	3.03	3.39	3.17	3.75	3.03
（％）評価の割合　評価４	42.9	3.6	53.6	10.7	64.3	14.3	64.3	60.7	64.3	28.6	71.4	42.9	67.9	42.9	64.3	35.7	50.0	25.0	75.0	10.7
評価３	50.0	25.0	35.7	46.4	35.7	50.0	28.6	35.7	25.0	35.7	21.4	50.0	25.0	53.6	17.9	46.4	39.3	75.0	25.0	89.3
評価２	7.1	75.0	10.7	50.0	0.0	42.9	7.1	3.6	10.7	17.9	3.6	14.3	0.0	10.7	17.9	17.9	10.7	7.1	0.0	7.1
評価１	0.0	3.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.1	0.0	25.0	3.6	0.0	7.1	0.0	0.0	7.1	0.0	0.0	0.0	0.0

国際的資質や態度に関する自己評価・アンケート

評価基準	
	4：よくあてはまる
	3：どちらかというとあてはまる
	2：あまりあてはまらない
	1：あてはまらない

分類		項　　目	4	3	2	1	平均値
国際的な事柄	1	いろいろな国の人たちと知り合いになるのは楽しい	56.7%	36.7%	6.7%	0.0%	3.50
	2	異なる文化に触れることは、興味深い体験だと思う	70.0	26.7	3.3	0.0	3.67
	3	世界の自然を守るために活動している機関を支援したい	43.3	50.0	6.7	0.0	3.37
	4	自分の国はすばらしい国だと思う	46.7	40.0	13.3	0.0	3.33
	5	今後、さまざまな国の言語を学んでみたい	63.3	13.3	20.0	3.3	3.37
	6	外国で起きたいくつかの歴史的事件について詳しく説明できる	16.7	26.7	50.0	6.7	2.53
	7	海外に行ったら、地元の人の習慣に触れたいと思う	63.3	33.3	3.3	0.0	3.60
	8	自分と意見や文化の背景が異なる人と協力できる	46.7	50.0	3.3	0.0	3.43
	9	自分の国の国民であることを誇りに思う	60.0	30.0	10.0	0.0	3.50
	10	海外へまた行きたい	90.0	10.0	0.0	0.0	3.90
	11	開発途上国の子どもたちが教育の機会に恵まれるよう支援していきたい	63.3	36.7	0.0	0.0	3.63
	12	外国人に積極的に話しかけてみたい	46.7	33.3	20.0	0.0	3.27
	13	自分の国に生まれ育ってよかったと思う	70.0	20.0	6.7	3.3	3.57
	14	英語などの外国語で書かれた新聞や雑誌が読める	23.3	26.7	43.3	6.7	2.67
	15	他人の意見を聞ける	56.7	43.3	0.0	0.0	3.57
	16	英語以外の外国語を学びたい	63.3	30.0	6.7	0.0	3.57
	17	困ったときに話し合って、アイデアを出そうと思う	56.7	33.3	10.0	0.0	3.47
	18	同年齢の外国人が話せる程度に自分も英語を話せるようになりたい	76.7	16.7	6.7	0.0	3.70
	19	自分の国の文化や歴史はすばらしいと思う	50.0	50.0	0.0	0.0	3.50
	20	世界の主な宗教の特色を説明できる	26.7	46.7	20.0	6.7	2.93
	21	多くの外国人と友達になりたいと思う	56.7	36.7	6.7	0.0	3.50
	22	外国語で書かれた新聞や雑誌に関心がある	53.3	20.0	23.3	3.3	3.23
	23	困難に直面しても、人と協力して問題解決に取り組む	46.7	50.0	3.3	0.0	3.43
	24	自分の国の文化や歴史の良さを、他の国の人々に発信したい	46.7	43.3	10.0	0.0	3.37
	25	各国に見られる独自の習慣を尊重したい	66.7	20.0	13.3	0.0	3.53
	26	自分の言いたいことを英語などの外国語で表現できる	33.3	23.3	36.7	6.7	2.83
	27	将来、同僚として外国人と仕事をしたい	50.0	26.7	20.0	3.3	3.23
	28	相手の気持ちを理解しようとする	70.0	30.0	0.0	0.0	3.70
異文化理解	29	私は、外国語を学び、話している	40.0	33.3	20.0	6.7	3.07
	30	文化的多様性は、社会に役だつ	73.3	16.7	10.0	0.0	3.63
	31	私は、2つ以上の言語（日本語以外にもう１つ）を話せることを誇りに思う	36.7	36.7	20.0	6.7	3.03
	32	異文化経験をつむために海外旅行に行く	43.3	36.7	20.0	0.0	3.23
	33	異なる文化的集団には違いがあると知ることが大切である	70.0	26.7	3.3	0.0	3.67
	34	多文化的な環境に暮らすことを、とてもストレスに感じる	13.3	30.0	30.0	26.7	2.30
	35	私が友達になる人は、ほとんど同じ文化圏出身の人である	23.3	43.3	26.7	6.7	2.83
	36	私の生まれ育った文化は、他の文化より優れている	6.7	30.0	50.0	13.3	2.30
	37	私はどこにいても、自分の文化的基準にそって行動する	6.7	33.3	53.3	6.7	2.40
	38	異文化的背景をもつ人を理解するためには、努力が必要である	53.3	36.7	6.7	3.3	3.40
	39	他の文化の伝統に興味がある	60.0	30.0	10.0	0.0	3.50
	40	他の文化の知識を得るために、本や雑誌を読む	50.0	30.0	16.7	3.3	3.27
	41	他の言語を話すのは、不安である	30.0	43.3	13.3	13.3	2.90
	42	移民や少数民族の人達が、新しい文化に適応するためには、出身の文化をできるだけ忘れるべきである	10.0	30.0	23.3	36.7	2.13
	43	異なる文化的背景をもつ人とぜひ友達になりたい	53.3	40.0	6.7	0.0	3.47
	44	自分とは違う文化の食べ物に挑戦する	63.3	23.3	13.3	0.0	3.50
	45	多文化的な環境に積極的に参加するべきだ	53.3	36.7	6.7	3.3	3.40
	46	日本はまたは私は他の文化的集団から、孤立しているように感じる	20.0	33.3	33.3	13.3	2.60
	47	私は、自分の文化圏の美術、音楽、娯楽しか受け入れない	3.3	16.7	30.0	50.0	1.73
	48	ある文化に属する人たちの行動を予測するのに役立つ、その文化的集団に対する一定の考えをもっている	16.7	46.7	36.7	0.0	2.80
	49	違う文化圏出身の人の考え方や行動に、しばしば戸惑う	10.0	63.3	23.3	3.3	2.80
	50	他の文化の風習や伝統を学んでいる	36.7	43.3	16.7	3.3	3.13
	51	他の文化の歴史や地理を学ぶことは楽しい	60.0	33.3	3.3	3.3	3.50
	52	私はどんな場面でも，自分の文化に合った服装をしている	13.3	23.3	60.0	3.3	2.47
	53	私は、他の文化の人たちが自分のやり方を理解してくれないのではないか心配である	10.0	43.3	33.3	13.3	2.50
	54	みんながやるから、なんとなく（あたりまえと思って）	23.3	26.7	26.7	23.3	2.50
	55	知識や技能を使う喜びを味わいたいから	33.3	33.3	26.7	6.7	2.93
	56	英語を勉強することで、言葉に対する知識や技能が深まるから	60.0	20.0	13.3	6.7	3.33
	57	英語を勉強しないと、いろいろな面からものごとを考えられないから	33.3	23.3	33.3	10.0	2.80
	58	今までに身につけた英語の知識や技能を失いたくないから	46.7	30.0	16.7	6.7	3.17
英語を学ぶ理由	59	すぐに役に立たないにしても、英語自体おもしろいから	40.0	10.0	43.3	6.7	2.83
	60	英語ができると、他の人より優れているような気持ちになれるから	6.7	30.0	43.3	20.0	2.23
	61	英語ができると、仲間からカッコいいと思われるから	10.0	20.0	50.0	20.0	2.20
	62	英語を勉強しないと、将来仕事の上で困るから	40.0	36.7	20.0	3.3	3.13
	63	いろいろな面からものごとが考えられるようになるため	40.0	30.0	23.3	6.7	3.03
	64	現在の生活の場面で役に立つから	50.0	20.0	23.3	6.7	3.13
	65	英語の資格がないと将来いい仕事先がないから	43.3	33.3	20.0	3.3	3.17
	66	まわりの人たちが勉強するので、それにつられて	16.7	36.7	30.0	16.7	2.53
	67	新しいことを知りたいという気持ちから	53.3	23.3	16.7	6.7	3.23
	68	他の国の人たちと知り合いになるきっかけとなる	60.0	30.0	6.7	3.3	3.47
	69	英語を勉強しないと充実感がないから	16.7	13.3	56.7	13.3	2.33
	70	英語が人なみにできないとカッコわるいから	10.0	36.7	30.0	23.3	2.33
	71	必要になってからあわてて勉強したのでは間に合わないから	33.3	20.0	33.3	13.3	2.73
	72	英語の資格があるほうが、社会に出てからも得なことが多いと思うから	53.3	30.0	13.3	3.3	3.33
	73	英語の資格があれば、将来経済的にも良い生活ができるから	31.0	37.9	31.0	0.0	3.00
	74	英語ができると、他の人より優れているような気持ちになれるから	10.3	24.1	44.8	20.7	2.24
	75	これからはある程度英語ができるのがあたりまえと思って	51.7	27.6	20.7	0.0	3.31

分類		項　　目	4	3	2	1	平均値
英語の学習	76	他の人と比べると、自分はよくやれると思う	10.0%	20.0%	50.0%	20.0%	2.20
	77	授業のレベルについていけると思う	30.0	33.3	26.7	10.0	2.83
	78	自分はよい成績をとれると思う	6.7	16.7	56.7	20.0	2.10
	79	他の人と比べると、自分はよい学習者であると思う	3.3	36.7	36.7	23.3	2.20
	80	他の人と比べると、自分は授業で学習する内容についてよく知っていると思う	6.7	40.0	36.7	16.7	2.37
	81	自分は、授業でうまくやれると思う	23.3	20.0	40.0	16.7	2.50
	82	授業で出された問題や課題を、自分はうまくこなせると思う	26.7	26.7	30.0	16.7	2.63
	83	自分の英語学習能力は、他の人に比べてすぐれていると思う	10.0	30.0	36.7	23.3	2.27
	84	教えられる内容を、自分は理解できる方だと思う	10.0	50.0	26.7	13.3	2.57
将来の希望	85	将来、国際的な仕事で活躍したい	40.0	23.3	30.0	6.7	2.97
	86	将来、何らかの形で国際社会に貢献したい	36.7	36.7	16.7	10.0	3.00
	87	将来、社会に貢献する活動に取り組みたい	43.3	30.0	13.3	13.3	3.03
	88	将来、グローバルなビジネスや社会に関する会議やシンポジウムに参加したい	26.7	23.3	33.3	16.7	2.60
社会で起こる問題に対する解決方法を見つけるためにあなたができること	89	関心ある事柄について、その問題の本質を発見したり原因を説明することができる	26.7	40.0	30.0	3.3	2.90
	90	その問題がどのくらい重要であるかを考えることができる	36.7	43.3	16.7	3.3	3.13
	91	問題の重要度の根拠を見つけることができる	30.0	43.3	23.3	3.3	3.00
	92	なぜそのような問題が生じているかいろいろな側面から考えることができる	30.0	40.0	26.7	3.3	2.97
	93	生じている問題について、知識や経験を通して説明できる	20.0	50.0	26.7	3.3	2.87
	94	問題に影響を与える原因の候補をチームメンバーと一緒に検討して、列挙し、まとめあげることができる	20.0	53.3	20.0	6.7	2.87
	95	問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる	23.3	63.3	13.3	0.0	3.10
	96	問題解決に向けて仮説を立てることができる	26.7	53.3	16.7	3.3	3.03
	97	仮説を確かめるため、データや情報を収集することができる	43.3	40.0	13.3	3.3	3.23
	98	問題解決に合ったデータや情報を選択できる	43.3	36.7	16.7	3.3	3.20
	99	集めたデータや情報の正確さがわかる	36.7	50.0	10.0	3.3	3.20
	100	集めたデータを集計して、図や表にまとめることができる	26.7	56.7	13.3	3.3	3.07
	101	分析した図表について、必要に合わせた使い方ができる	40.0	36.7	20.0	3.3	3.13
	102	分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる	34.5	48.3	13.8	3.4	3.14
	103	作成した図表や分析結果を用いて、有効な問題解決策を提案できる	23.3	43.3	30.0	3.3	2.87
	104	提案を適切にプレゼンテーションできる	36.7	36.7	23.3	3.3	3.07
	105	提案した内容がどこまで有効かについて説明できる	26.7	50.0	20.0	3.3	3.00
	106	自分の発表に対する質問に適切に回答できる	13.3	60.0	20.0	6.7	2.80
３年間の成果	107	共生を図る上で何が課題となっていることを適切に捉えることができた	53.3	43.3	3.3	0.0	3.50
	108	ターゲット（到達目標）を意識した課題設定を行うことができた	56.7	40.0	3.3	0.0	3.53
	109	数ある課題の中から、18歳の自分が取り組むことができるものをアクションプランの課題として設定できた	53.3	40.0	6.7	0.0	3.47
	110	ライフステージを考慮し、アクションプランの道筋を考え、18歳の自分ができる課題解決策を実行した	53.3	40.0	6.7	0.0	3.47
	111	連携を求める外部団体の選択は適切であった	50.0	36.7	13.3	0.0	3.37
	112	外部団体とのやり取りにおいて礼節をわきまえた言動および行動をとることができた	60.0	30.0	10.0	0.0	3.50
	113	外部団体の担当者に自分のアクションプランの趣旨や方法を簡潔かつわかりやすく伝えることができた	56.7	36.7	6.7	0.0	3.50
	114	アクションプランの計画段階と実行段階において、その内容に大きな変更はなかった	16.7	60.0	13.3	10.0	2.83
	115	外部団体の担当者からのアドバイスをアクションプランの内容に反映させることがあった	43.3	36.7	10.0	10.0	3.13
	116	計画性をもってアクションプランを実行することができた	30.0	53.3	16.7	0.0	3.13
	117	探究報告書作成に向けてジャーナルをきちんと整理・保存することができた	43.3	43.3	13.3	0.0	3.30
	118	下級生への引き継ぎの意味を含めて、実施報告書をきちんとまとめることができた	53.3	43.3	3.3	0.0	3.50
	119	ＧＩの取り組みを始める前と完了した後で比べると、共生を図ることの大切さを感じるようになった	60.0	33.3	6.7	0.0	3.53
	120	共生を図る上で、何が課題となっているのかということに常に新聞・TV等で情報収集するようになった	40.0	46.7	10.0	3.3	3.23
	121	大学進学後や社会人となってからも、共生に向けた何らかの課題解決に向けたアクションを自ら起こしたい	36.7	46.7	16.7	0.0	3.20
	122	大学進学後や社会人となってからも、共生に向けた何らかの課題解決に向けたアクションに加わって行動したい	40.0	40.0	20.0	0.0	3.20
	123	討論や交渉が必要な場面で、ＧＩでの経験を生かすことができると思う	53.3	36.7	6.7	3.3	3.40
	124	自分のものとは異なる意見や考えを合意形成を図る上で反映させるのは難しかった	43.3	40.0	16.7	0.0	3.27
	125	自分のものとは異なる意見や考えを合意形成を図る上で反映させるのは必要なことだ	53.3	43.3	3.3	0.0	3.50
	126	自分の言葉でわかりやすく簡潔に相手に説明することができるようになった。	40.0	53.3	6.7	0.0	3.33
	127	外国語の活用能力をこれからも磨く努力をしていきたい	60.0	26.7	13.3	0.0	3.47
	128	外国語を活用できるようになること自体が、グローバル化に自分が対応する手段の一つである	63.3	33.3	3.3	0.0	3.60
	129	外国語の活用はツールの一つにすぎず、グローバル社会で活躍するには専門的知識・技能が必要だ	56.7	30.0	13.3	0.0	3.43
	130	ＳＧＨの取り組み全般は自分にとって有意義なものであった	56.7	36.7	6.7	0.0	3.50
	131	ＰＣやｉＰａｄなどＩＣＴ機器を積極的に活用し、技術も向上した	71.0	22.6	6.5	0.0	3.65
	132	真贋を考慮して情報の収集に努めるとともに、集めた情報の取捨選択を適切に行えるようになった	61.3	38.7	0.0	0.0	3.61
	133	物事を批判的に分析することができるようになった	29.0	61.3	9.7	0.0	3.19
ＳＧＨ（ＧＩ）の取組みが貴方にもたらしたこと（自由記述、良い点も改善が必要な点も含めて）	1	私にとってＧＩは将来について考えるきっかけとなった。					
	2	世界のために問題への興味・関心を持つようになった。					
	3	課題に目を向けることができた。					
	4	自ら行動する力を手に入れられた。					
	5	ＧＩがなければこのような取り組みに触れることは絶対になく、様々な問題について考えるよいきっかけとなった。					
	6	他校のＳＧＨの発表を聞く機会があり、論理的に物事を考えるきっかけをつかんだ。					
	7	世界に関心を持ち、問題に対して自分の意見を持つようになった。					
	8	高校生が企業と連携したりして、自分のためにもなり、考え方も広くなってよかったと思う。					
	9	世界で今何が起きているのかに目を向け、問題解決へと進むには今の自分に何ができるのかを考え、行動する力を養うことができた。					
	10	私自身は大きく成長できた。					
	11	視野が広がった。					
	12	人と話し合い、新たな意見を生み出すことの面白さや大切さがわかった。					
	13	ニュース等をよく見て、社会に関心が向くようになった。					
	14	ＳＧＨに参加できて本当に良かったです。続けて欲しいです。ありがとうございました。					
	15	自分で計画を立てて実行することができるようになった。					
	16	今まで全く知らなかった難民問題を知ることができた。					
	17	ＧＩの取り組みを通して今まで見聞きしたことのないような事柄や実態を知ることができた。それによって将来自分の進みたい道を見つけることができた。					
	18	ＳＧＨの取り組みは自分にとって良い経験となった。今後も自分で問題を見つけ、他の人々と協力しながら解決できるようになりたい。					
	19	ＧＩの取り組みは私の力を伸ばしてくれた。					
	20	ＧＩでチームワークや協調性を学んだ。					
	21	取り組み自体は自国だけでなく他国への関心や問題を見る機会を得ることとなり良かったが、課題が多すぎて大変だった。					
	22	良い経験になったし、知識も増えたが、スケジュールはもう少し考えた方がいいと思う。					
	23	各種大会でディスカッションやポスターセッションなどへの参加の機会が少なく、他校との差を感じた。他校は優勝を目指して必死だと感じた。					
	24	スケジュールが過密で時間がなく大変だった。					
	25	やることが多すぎる。他の科目の宿題や予習・復習とのバランスも考えて欲しい。					
	26	とてもためになり、大学進学にも大いに役立ったが、生徒への負担が大きいと思う。					
	27	ＧＩに力を入れるなら他の課題を少なくするべきだと思う。					
	28	情報センターが他の学年の使用と被って使えない時期があり、パソコンを使わなければできない課題を出すのはやめた方がよい。					
	29	部活動や生徒会活動都のかけもちで、ＧＩにかけられる時間が足りなかった。					